

時 11

3529

~~3440~~

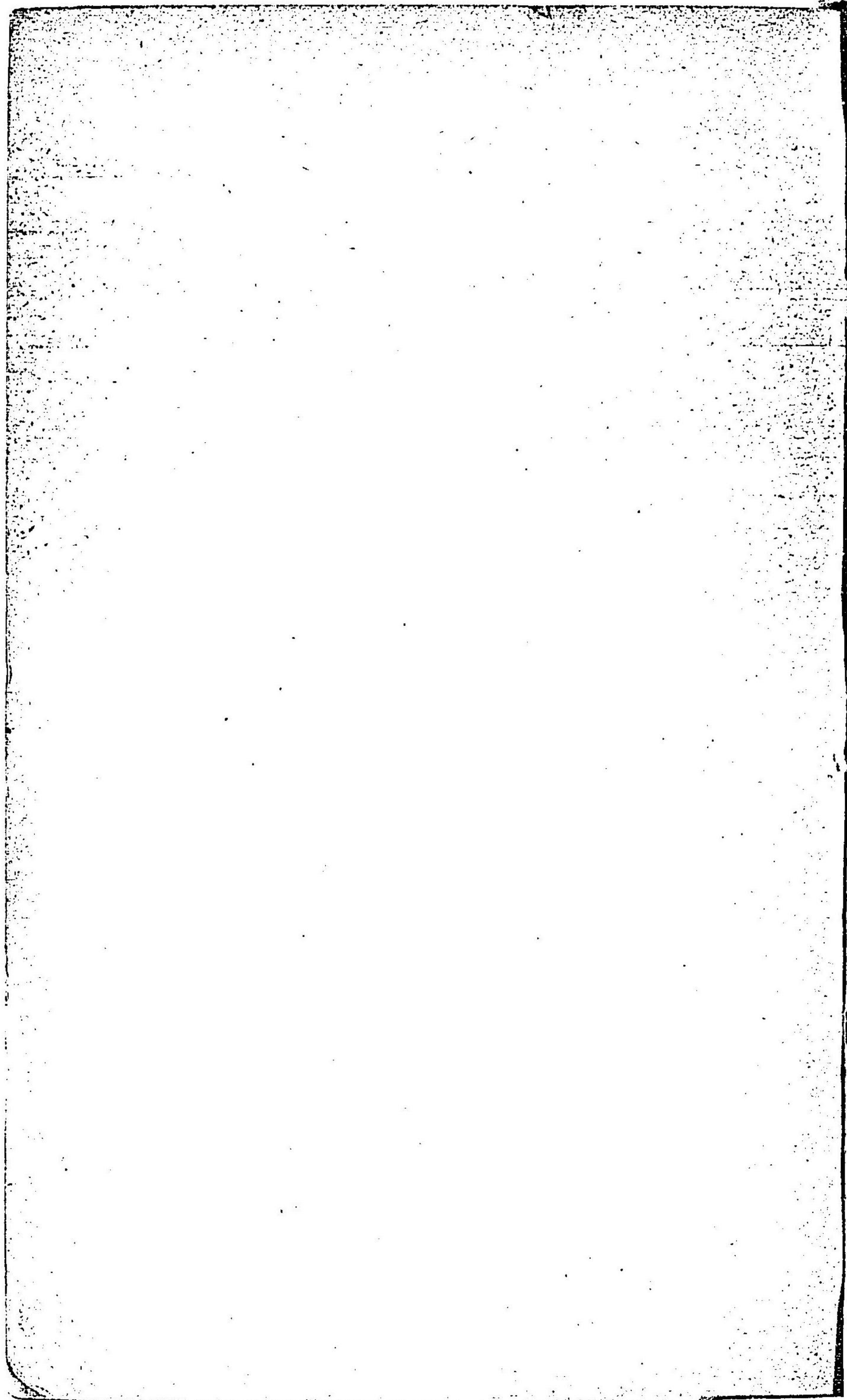
84

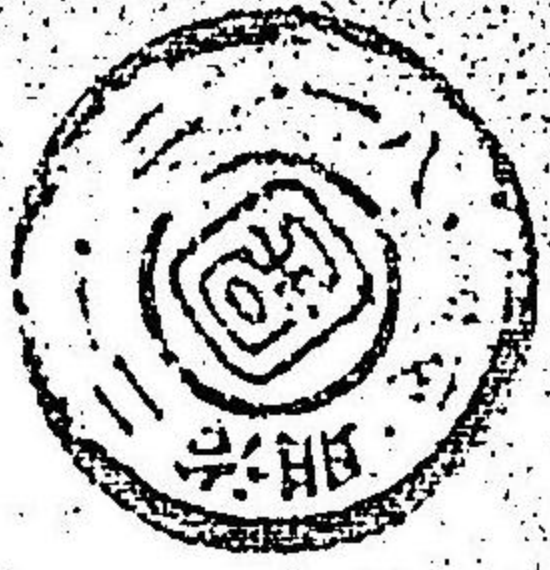
明治  
笑談  
**太平俱樂部**

小石居士閱  
奔雷道人著

成文堂發行







太平俱樂部自序

No. 872

高臺に登りて見れば。煖爐の燈天にたなびき。卑く裏店に入つて見  
 れば。空腹に母をせがむ餓兒も無く。寔に大聖代の幸福なり。不二の  
 山より高く。太平の洋より深し。腹鼓打つて太平を謳ふ。蒼生の大  
 慶と悦ばば。擦つた揉んだ。何ぢや彼ぢやと。壯士連が奔走なり。是も  
 太平の餘瀝に。酔ふて平素の慷慨家。後悔先に立ぬなり。アラ喧し  
 や。余ハ浮世を茶にして澄まし。甘く見抜いて。腹の皮比破れるま  
 を腹を叩き。腹の皮の糾れるまで笑つて唄つて。他よりも先づ我面  
 白く娛まへやと。南向きの圓窓と。裏借家の明取と。昔は淨は古机  
 に。砕けた硯と禿た筆。當り委せに撲つた故紙も。今流行の小説時。  
 書肆が屑屋の價より好く。附けたを幸ひ打た手を。側に見て居た嘲

弄生が。何だ八笑人の糟粕に。均一き無用乃平凡笑談。夫でも錢に成るとい有難い。是も太平の餘澤か。ドレ見搦ろと。矢張太平に吊込まれ。一枚開いて面白い。二枚開いて可笑い。當時書生の八怪八笑。俱樂部とは新しい。足下もあろく油断のならぬ洒落生と。有つた事か無い事か。戯述と判然明言からい。無いには知れて有るどらうが。虚といふ實あり。實といふ虚もあり。何だ先生返答如何にと。問に應じて鼻たかくと。答へて曰く。虚乃實のとも。椎茸たほの言ふたけ紫痴ヨ。虚も實も見る人ぞ見る。明日の枯る縁日の花物。無根草てふ一種の草なりと。夫子自ら道ふ。

明治廿年霜ふる月

奔雷道人識

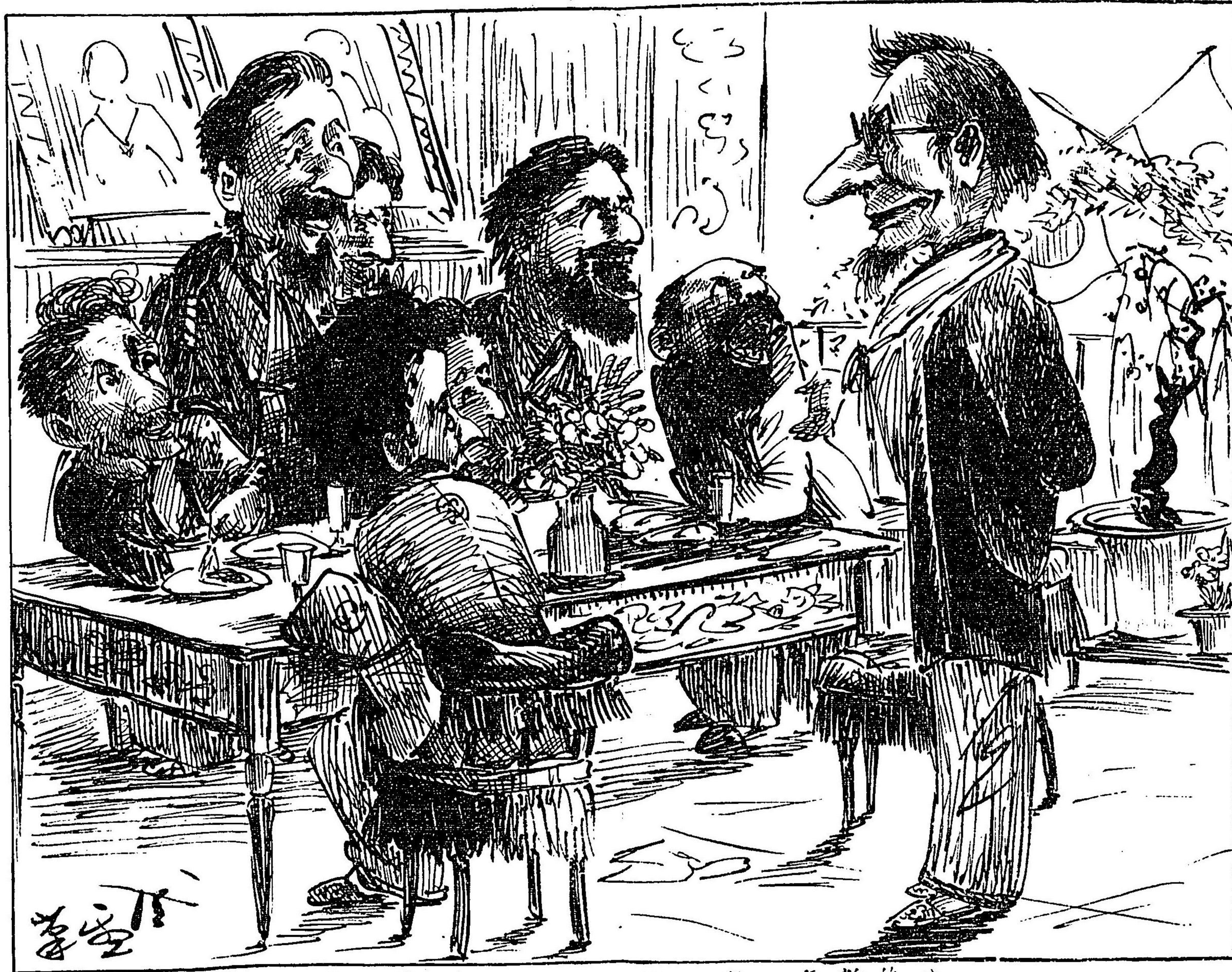
### 太平俱樂部序

他人の痛さの三年も忍ぶが岡の初日影に筆を起して自家の拙さの坐間臣太郎が豫て計畫の大茶番に擱き三十三の年の暮れて三十四の春の初鶏東天光一番聲のたかくと八笑美事一喝采を當代義士の譽に奪はれ一年四季一八回の遊事を寫したる奔雷道人が遊戯の著作斬新絶奇の意匠筆法の妙さも微意を寓し妙趣を籠め虚中に實有り有中無に歸る談笑乃間大いに悟るべきもの有り余元米道人が所謂洒落的滑稽の思想に乏しく極生眞面にして洒落を質問して笑はるゝとあり斯る著作の序を爲すの柄に無業なから請るゝまくに先一讀したとあるで洒落的滑稽的可笑的嘲弄的今一層の筆力と思ふ所も無きに有らねど三遍讀んで煙草を服み熟く考ふれば矢張

夫子自ら道ふ無根草太平の恩澤の露を視れ海に空けた戯れの筆を  
さみ眞の味ひは不足心地の中に深さを覺えぬと云爾

明治二十年十一月下澣

小石書屋主人



李石

八笑新年、宴、開、一、年、遊、戲、議、又

太平俱樂部目錄

一 春

初日の出

八笑の年始會  
歐米の風俗記

八丁

一 夏

避暑の旅

富岡の競游泳  
大磯の救助船

三十一丁

一 秋

野分の跡

田家の暴雷雨  
別荘の俄演劇

五十三丁

一 冬

除夜の雪

炬燵の地雷火  
忘年の大番茶

七十六丁

持 11  
84

春圃日  
起手  
老成

明治  
談  
太平  
俱樂部

江戸

發端  
太平俱樂部

小石居士校閱  
奔雷道人戲著

何に祥たき御代では在るよ、明治てふ帽子冠る時津風は、巷頭の柳枝を鳴ら  
さず、朝夕の撒水埃を制め、草木靡かぬ隈もなし、聲響鼓腹して太平を謳ふ、  
民の庵の賑ひしと、登る烟は紫の雲かどぞ紛ひもなし、君の惠の露も露ひ、  
老も幼も咸其職を盡し、堵を安ら勉め勵めて、いよ／＼豊かにいよ／＼榮  
えゆくこそ祥たけれ。職に勉め業を怠らず、朝に夕に張合の簞盤の音り、一  
千餘町に響き渡りて、西に奔せ東に走りて、太陽と競争して尙及むざらんを  
恐るゝが中に、無聊に堪ず無事を苦む一種の族あり、三度の食足れりとせ



朴庵主人曰  
書生ノ類  
盡サ、ルモ  
多キガゴ  
トシ若シ書  
生ノ乳臭ナ  
ルヨリ出  
成如ク盡ク  
徒下不シメ  
言フハ易  
行フハ難  
言フモ行  
言フモ行

ず、美味珍膳も美しとせず珍しとせず、日を消すと又趣向を盡し工夫を凝らし、他にいせせる職業も無し、是ぞ偏へに太平の餘澤君の恵みのいと深く、寔に有難たるとになん、何なる月日の下にや生れ来りけん、ア、羨ましい哉美殺矣。

試みに質すべし、書生とは當世の流行言である、家には妻あり子を抱くに、尙我輩は書生で有ると言ふ者あり、書生とい何なるものであるよ。頭髪蓬鬆として衣厨に到り袖腕に到る、柱大の圓杖俎然たる下駄、放吟横行する者乎、然らざりなり。親族を欺き友人を騙り、學資を擲つて足らず、衣服を典じ書籍を賣り、下宿を喰倒して顧みず、附馬を牽き來りて校舎を放逐され、恬として耻ざる者乎、否然らざるなり。坐右書を堆かうして讀まず、字典を枕として爲永流の淫本を誦し、試験に及第せし事なく、甲首に壹期乙首に壹期、學校の課業と授業法を品評して諸書の總論緒言に通ずる者乎、決して

行フハ稀ナ

然らざるなり

然らば書生とい何なる義にていや、言の序に説明すれば即ち斯でも有らうか、未だ此社會に對して何の責任もなく、僅に學校の巢を離れて、是から漸く社會に現はれて、我長じたる所を以て、實地に一番腕を見せやうといふ大技量を有し、腹の中への經國の策を抱くも、身の未だ定まれる職掌もなく、妻子眷族も且無いとけで、謂は賣らんかなく善き價を待つ身分にして、至極大切な必要な品で有る。爾ればこそなれ、罵つて曰く白面の書生天下の事を知らずと、其様な言が有るか何だか知らぬけれども、未だ世の中の事に經驗薄く、耻を忍ぶといふ事も無く、押を強く遣けるとも無く、面の皮が腫の皮の如く、一種の色着いて厚くならず、塾部生の北向窓に日の目を見ると稀に、衣服の敝垢を些少は隠す氣で、夜のみ運動に散歩して、顔色自から白き者を指したる意なきとぞか、嘗て別に學校の講義を聞いたでも無か

りき。又曰く「書生々々と輕蔑すれど今の参議の皆書生」と足駄の音に拍手を取つて諸ふ者あり、今の大臣なれども、昔の参議と云つて、國家の大權を左右する、英雄豪傑智者才子と雖も、其初めの一ト度書生の藉に列したるとあり、今日の一介の書生とて、一朝志を得ば大臣たり、議官たり、次官たり、顧問たり、局長たり、等外たり、御雇たり、吾腕次第富貴賤欲する儘なり、手に唾きして取るべきなり。俱サツトストーンといひ、比スマーシといひ、克リーブランドといひ、李鴻章と云ひ一度の書生で有たに違ひなし、馬んぞ知らん「今の参議の皆書生」と諸ふ先生に一生を只諸ふのみにて了る者無らんと、書生の出世も亦むづかしきものにやあらん。重いかな夫れ書生の責り、樂みなるかな夫れ書生の身、下宿屋の二階に鹿食を甘んじ、臙を枕にして天運を考ふ、案外棚から牡丹餅の落ちて、乍ち黒塗の手車に乗るの榮を拾ふとあらんと、餘り當にすれば落膽失望不平に自在酒の損を招くと

悟下阿房曰  
八書生ノ説  
明至極妙デ  
グス之レ沼  
々タル一場  
ハ議論デメ  
スナア

あり、ウカとは諸葛孔明も氣取る可らず、劉玄德の肖像仲見世の賣物に正礼附とならざるなり。  
世の中を鳥の目鷹の目利を得んと欲し、先を駈られんとを是怖るといふ中に、日光土産の蕃椒より辛い世を、晒しの悪い煉羊羹、惡甘く見透して異に茶にし變に澄し、政論でもありヤセン、萬事ハ風流的と茶氣的（何處の語だか妙な言だ）で行たいもんでグスあるんど、脱かねたか國訛りで重くるし  
い東京兒、前文の解説以外にある一種の書生群あり、草廬坊、喬松齋、薰子公、龍城將軍、青眼兒、蝸入道、文才子、劇通人など、因る戲號を稱し、自ら瀧亭鯉丈が八笑人に比す、頼もしい哉八笑生。吾輩書生に限りヤス、兎角世界の書生でグス、なんのかのひと一言おとに書生を帽子に冠ると雖も、實ハ笑生にして、天台山に酒顛を宗とせざるも、洒落禪の門を開きて遊戯道場に氣樂三昧を修し、爲る事爲す事駄の字の冠詞付き他よりの只我面白の同

六  
臭味、目の寄る所の玉ならぬ瓦礫の友を集めて俱樂部を組織し、冠らずに太平の二字を以てし、名けて太平俱樂部と謂ふ。取締なき下宿屋を巢窟とし、春の花、夏の涼み、秋の月、冬の雪四季の詠めの絶なんを恐る、茶番りの脚色に政治家が反對黨の内閣を覆へすよりも一層の工夫を凝し、年が年中吾身を吾身で持扱ふ安氣羅漢、五百の錢を取る職なきも、寝て食つて遊んで月日が送れるとらふり、偏へは是大君の恵みの露、生命の洗濯の爲續けとの、寔に有難き御恩澤、深きなかく測り難く、其の類にまで太平と稱するの、眞に是太平の祥にこそ。

諸又八笑生の來歴と云つバ、未だ何府縣の士族か平民かを知らず、況んや華族なんぞと思ひも寄らず、或は華の上に馬の一字の加はるゝ知らず、文部省の監督を受けざるも、學則整理して規律嚴正なる學校なんぞの七里つばい、東佐月謝さへ端と納まれば、生徒の學業の進歩の二の町へ願つた。

阿房曰質屋  
ノ管仲デモ  
口説落シ高  
利貸ヲ籠絡  
スルヤウナ  
先生ハ長ク  
此群中コ止  
マリヤセン  
ナ管仲ヲ口  
説ハ先輩ノ  
お尻ニ付イ  
テ演説ノ前  
座チ打ツヨ  
リハむづり  
しラゲスカ

七  
放任隨意主義の教育家に薰陶を受けて、各専門の學を修め、長ずる所ありて學位を有せざる者なし。其長ずる所の質屋の管仲を談じて高く借りる辨舌の爽快なるの、古昔の美ラボーも何だ籠棒藝を喰へと三舍を避けしむべく、高利貸をおひやらかして金を借り、期限を延させると蘇秦が六國縱横を論ずるよりも甘し。國からポット出の若武者を誘き出して、溫柔郷里に軍糧を失はしむるとの、其智謀那勃翁に勝れり、青樓の居残りへの燈室に籠城して糧道將に絶んとするも、自若として動ぜず、廊下通ひのお婆さんを抱込み、前夜の敵相を説き伏せ勘定を借りて、向やら斯やら血路を開く、雄膽計畧千窟城の修正成をも感服せしむべし、學位試験の及第の覺束なくも、試業文を書かず耻を搔き、落第正に外れなく、授與の學位に各々差あり、學士、博士にの必らず冠詞あり、淺博士、無學士、放逸學士、輕財學士、なんぞ、能其人と爲りを表はし、天然の商標の面相に見はれて、懷中若し温かなれば直に

盗見の餌となるべく、間尺寸法自ら緩かなり、只見る何となく恐惶ぶつた涉面相、誠にめでたき候ひける。即ち是八笑の専賣特許、愚にも付かぬ事に誤託を並べ、得手勝手都合の好い様に理屈を附會る、手前味暗の効能書、元は何れの國からか出て来た書生が講學の餘暇、遊戯に催得ず滑稽づくし、眼七卒八の笑興なくも、虚呂松茶目吉が失敗あり、アハ、妙々、何だ詰らぬの品評も瞬に茶が沸くと沸かざるを、誦様の上手下手、慧眼を開いて紙背を見透せば、八人の書生が新陳代謝、互ひに競ふ腕くらべ、喝采と浴が来らばお笑ひ草而已。

春 初日の出

八笑の年始會  
歐米の風俗記

明治三萬三千三百三十三年山王權のお猿の正月元旦である、年の始めの正月、月の始めの元旦、日の始めの日の出即ち初日の出、東の方からソツと出

熱室日開卷  
奇言ニ乏シ  
キナ惚ム

る所を拜むと、其年の運が好い貧乏神の影を潜して福の神の入来あり、世界共同の大ランブと言は、日用の器具に過ぎざるも、お日様も天道様今日様と名の付けやうで、少し貫目が増えやうなど、日の玉の貫目が増えにこあらず、量る人の貫目の減るのである。何でも一年の事、元旦の朝にあり初日の影を拜まばやと、寒さを厭はず眠きを耐へて、霜の柱をザツツと蹴付し忍が岡の片隅、鐵道の堀割つた崖の上をフアリ〜と、往きつ来りつ果し株腰打かけ、先一服と致さうかと獨言、マツチを摺つてフカリ〜日の出を見るのも寒いものだ、酒も冷で、燗の出来るまでが辛抱がし切れない、ア、冷たい、下腹まで裂るやうだ、ブランドーにすれを少し呑んで暖まるものを、夏の氷水が此位冷こつたら宜らうが長し短し、イヤ暑し冷たし造化の配劑耐甘くと參らぬものだ、腹の中が少しボカついて来ると身體が滅法凍々と寒い、エ、モ少し、オヤ瓢が虎列刺

春圃日八笑  
一流ハ何可

と来て悉皆瀉し、たお積りの情ないや、オ一寒い、早く出やがれを  
宜いに元日から斯う気が長くつちやア今年一切日が永いだらうツ、フ  
ンブが歩いて来るから面白い、人魂にしちやア暗淡として低い、イヤ一足  
が有らア查公の御巡行と相見えた拙なごの腹へストーンを仕かけてさ  
へ、ア一寒い、に、お職掌なれば大きに五苦勞、茲が夫れ、其の、  
人は忍耐が肝腎だ辛抱の経験に、巡査に成れと云たが甘いと言ふナ、  
今年の元日の意地悪く寒いナア(ブル)と慄ゆる(巡)コリヤ其方の  
何ぢやム、夜中箇様な所に何を致して居る最前か、何か申して居る  
様子じゃが、見れば瓢を提げ少々酩酊の氣味でも有るが、一體何デニ申そ  
姓名か、コリヤ、草拙へ尋問、元日の初誰何なれなんぞさあ太陽  
曆にも、季背せにも未だお目に掛らん、拙、拙、草盧坊と申す風  
流人で、承知も無からうが、太平俱樂部の八笑生中第一流の才子で、

阿房日月賦  
實、認定ス  
ハ皆濟セザ  
ル先ニ所有  
權ハ他ニ移

巡深夜に此邊を徘徊致すと、何用あつて一体深夜に、草俳諧の拙が本  
業で無いが、初日か、初空や、位ねお茶の子さいさ朝飯前  
の手附でござる、只今一句詠んで、巡俳諧の事を問ふので無いワ、深  
夜に及んで此邊を徘徊致す、甚はだ宜しく無いちゆもんだ、其方と狂人  
ぢやナ草申戯の免候へ至つて風雅な男でござる、何用と言つて今日  
の元日の初日の出を見に参つたが、未だ太陽が昇らんから斯う一服吸つ  
て、お昇りを相待つといふ様な譯でグスが實に寒くてナ巡何と申す初日  
の出を、途方も無い、只今十二時を打つたばかりだ、察する所其方は時  
計を所持せぬナ、草爾う安く踏み王ぬな、是でも金側の時計を所持致  
して居るテ、尤も月賦は拂ひ切りませぬがナ、十八金に相違ないので、  
鎖の五圓の押引きで手合せとま損なつたやうな譯でグス、時計が何、  
巡時計を所持するなら、真夜中よ日の出を見に来る奴が、草あると

ル、ナキア  
危イモノ

つて無いとつて、狂ふ様な品でない、鳥度お燈りを、巡時間の規則が有りまして、便々として居られぬ早く立歸れ草今歸つて、風流的の主義に背きやす、マア、時計の狂ひの無い所を、ナニ徐々モチ太陽の顔を出、マ、出す、オヤ變た、十二時十分だ、確に先刻五時五十五分だから出て来たに是で、ハテ時計の狂ふ筈はないが、今年の皆既蝕で太陽の行道が違つたか知らん、十一時廿五分の、寒い筈か巡十一時廿五分に長針と短針を見違へたで有らうが、草夫でも夜食に二合道つてグツと寝て目が覺めて、五時五十五、巡々せす早く歸れ、世間でハ大晦日だと申すに氣樂ナ、草來巡査公も大晦日、年の關を御承知か、下情に通じ王ぬの感心イヤ大に御苦勞を掛けました、夜の明けつぷりが吝嗇だと思つたら未だ年の暮の關所を跨いだばかり、初空やどころか年の瀬やだ、寒い筈だ、元日から小言の聞き初

深眠日門番  
ノ口氣ニ據  
レハ盃シ下  
廻リノ行渡  
リ悪キナラ

め、イヤ、失敗の爲納めて復來る巻を待つかい  
晦日知らずの氣安さに晩酌の酔で、寝惚眼に時計の針の長短を誤り、上野の山風に吹さらされて、憎々と草廬坊が寓居下谷茅町の同樂院といふ梵刹へ歸り來れば、門は堅く閉して押せども開かず。  
草 オイ、(ドン、ドン)大爺、オイ、開けて下つし門番エ、今漸々寝たばかりだに、葬式やら翌日でも宜いのに、忌々しい、葬式ぢやア無い奥の草廬坊だ、已だヨ、門番 アンタ奥の草廬坊だ、根津の歸りにヤ早いが、ハ、ア振られ、草ア、何でも宜いといふとよ、大爺大爺だナ、寒いナア 門番 是だから下宿なんざアするなど、云ふに大黒が欲強つてヨ、鍋焼きごんの一杯も土産に持つて來れば宜いに、彼奴も錢ヲ無エナ  
漸く門番の爺に謝り閉口して、潜戸を開いて賢ひ勝手知つたる庫理の方よ

朴菴曰董子  
公ハ何ナル  
外交政略ヲ

十四  
り、暗を搜つて借切りの座敷に歸り入れを、最前燈火を消して出でたるに、ランプの光り晃々たるにぞ、ハテ怪しからんランプぢやナア、と心潜に訝りながら、瓢を柱の釘に掛けて、寐るに燈火の入らないから、消して置うと云ひながら、半身の夜着の中に入れ、首を延してフツと吹んとせしを側の夜着の裡から、草廬坊初日の出の何うしたエ、と聲を掛られ

草エ、大きな聲で吃驚した、お蔭で喊呢が止つた董子公尙寢ずかエ、寐るの寐ないのつて、君が獨りで百雷の一度に落ちたるが如しといふ、大駟で寝るのが癖に障つて、僕ハ悉皆寝そびれて居ると、十二時前に起きて騒ぐから、此奴寝惚たな何うするかと、狸を遣つて居たら、瓢を擔いで出かけたが、必定晝間約束した初日の出を見に、板敷をとると思つたから、知ぬ振して居たのサ、初日の出の素的に寒くつて門番に冷かされるものだらうツ、アハハハ、草何も人が悪い、實に君ハ信義が無い、君の様

有スル手並  
クハハ手並  
ガ拜見シタ

な政畧家ハ昔のお留守居役に成るとお跳ひ向ダヨ、比スヤーク既足で逃るだらう、夜明までハ尙五六時間あるから、華胥國王へ拜賀に行つて來やうか 董 初日の出見も夢又限りヤスといふ奴サ。

草廬董子が冗言の應答、も忽地に駟と成り、鼻から提灯に暗を照らして、莊周を訪ね行きげり。東天光と告げ渡る家鶏の初音に、ハヤ夜ハ明けぬれど復寐の夢ハ未だ覺めず、日ハ三竿に到る頃はい、庫裡の板の間ガタクと踏み鳴らしつ、ドヤ〜 入來る門禮者、同じ氣樂の笑牛連、廊下の紙門押開きながら

△サア〜起きた〜 元旦かゝの朝寐坊、今年中を寐て暮とうといふ氣だらう、◎ 起きたり〜、〇 卷つて北風に吹かせやうか。築波の初風でハ流石の帆柱も、ゴッヤとするだらうツ、一 同 アハハハハ、草アハハハハ、騒々しい奴等だ、人の氣も知らねエで、滿北辰此處に居ると、衆星之

阿房曰喬松  
齋紙幣ヲ  
大事ニスル  
ハ其本領否  
金ガ欲シイ  
人間ノ本色  
デゲモウ

塾堂曰事實  
無根ニ付キ  
取消スヘシ

阿房曰暗黒  
ノ耻ヲ明ミ  
〜出シタリ  
此類ハ世間  
に往々在ル  
奴サ

春圃曰ぶら  
んでヨリ  
尙怖ロシキ  
モノハ無キ  
平

に向ふから強氣ぢやア無しかい、草 今年ノモチ顔の見納めだヨ、い、い、と  
緊固抱いて放さないから、漸う振切つて曉方に歸つて自分の躰で寐た所  
を、紫痴ぢやアありやせんか、エ、喬松齋紙幣ばかり大事がらないで、  
何か年玉に初々しく奢り玉へ、籠城將軍、青眼兒、文才子、劇通人、蝸入  
道ツラリツと、見榮のある御面構へを、並べさせ王ふて、蝸 コリヤ〜誤  
託ハ跡の事、昨夜は遂々拘引されて署で深しといふ譯か、劇ハテ氣の  
毒なとぢやナア、草 申戯言のちやア否やせん、彼の娘が放しやせんから、  
文 巡查に引致られたのかエ、意氣地が無いぢやねるか、平素の辨舌も  
他行の用に立つたなかつたか、い、草 何か其様な筋が有つたのかエ、蝸  
有つたツて無いだつて、失敗を爲納めの爲始めといふ一件サ、草 産を吐き  
王へ知りもしないで、皆々ワ、い、い、い、我々五人證據人だ、原告人の蝸  
入道陳述をへしサ、蝸 童子公聞へし、昨夜六人が鶯谷の温泉で、秘密會

議の結果が根津の忘年會と變つて、新坂を登つて來ると、い、劇折しも開  
ゆる山寺の鐘の確かに十二時を 交ツとなしよ、巡查にお小言頂戴をし  
て居る奴が有るから、密と立聞きとると、自稱風流家草廬坊が、初日の出  
を見るどて、時を間違へ黒暗を彷徨て居たお詮義サ、草 其様なう拙等を出  
し抜いての忘年會を、い、番出し抜くといふでも無いが、夫のツレ、い、其  
の、い、い、彼の娘が時計の針を見て、ア、懐懐よ今夜の時言ハ何故遅いだ  
らぞ、なんかんと罪を時計に着せて居るから、先が急がれ人の難儀を救ふ  
て居る間ハ無いサ、持付けない者が安時計を問々持つと、氣に成つて成  
らぬものサ、徒黨の面々打揃ひ、斯年頭に罷り出たる者へお屠蘇でも出  
そうなものだが、太平俱樂部の初會を祝して、是から忘年會を開かうでい  
無いか、文イヨ〜蝸殿の一言お屠蘇の瓶が繰出しやす、屠蘇にしてハ香氣  
が無い、又例のブランドーハ恐れ入る、ブランドーを呑むと一命に關はる



塾堂曰袖ノ  
下トハ眼光  
炯カナラズ  
ザルナリ

朴巷曰好ム  
所ハ其性ヲ  
表ハストカ  
亦好ム所ナ  
其夫或ハ  
者ナルカ什  
庶

塾堂一人ノ  
專權ハ平和  
ヲ破ルノ基

ツて、醫師の忠告で止めたとエ、夫の結構だ夫のふめでたい、是はく  
薫子公のお酌で、味淋でい無い池田の銘酒でケス、夫はいたみ入つてあ  
じけない、齋松齋坐つてばかり居ないで、茶碗でも出すべし、猪口なんぞ  
ぢやア、小さくつて間に合はない、薫子公お重詰かエ素的な貯藏だ、青察す  
る所お寺の大黒天から、袖の下とぬふ筋らしい、大黒天が純張芝居を見  
物の尻を押へて、其様なに出所の調べないでも毒の、、、、薫子公なか  
く、商法氣が有るから、一ツ穴の貉が籠、ヤ毒の無いとハ限るま  
い、劇是ハ蝟公よりお益頂きますすべし、頂ぎ、、、、ますすべし、蝟な身振をす  
るぢやア無いか、劇吉例に會我をちよつぱり、草拙が元旦の讀初めに一首  
浮びやした、謹聴々々

糸ほけ眼に時計の針を見損ひ

草盧坊

今年も謹責の初日の出かな

是より寺男を使ひに駈せて、酒肴を追々持込み、新年の宴を開き、八笑交る  
くの藝づくし、薫子公が得意の義太夫ハ、自分節の素語りに勝を覆りかへ  
し、劇通人が自作の改良勘弁帳ハ、曲節に協いさるり、自分だけが十八番の  
高調子、草盧坊が娘の品評、文才子が平家の曲、青眼兒が西洋詩の誦吟、籠城  
將軍が唐詩の吟聲、齋松齋と蝟入道がナンコ、思ひくの興に入りて、元旦  
の日脚もいつか西に傾き、北向窓の暮際早く、燈を呼ぶ頃と成りけるにぞ、  
草盧坊も驚きながら發言しける。

草 昨年もおめでたく、太平を誦ひ世俗を笑つて、俱々府も一ツ年を取り元  
旦の初會から此全盛ハ、俱樂部の安寧繁昌思ひ知るに足るべし、ソコで以  
て本年の洒浴初め、茶番の大演習、春季初茶番を趣向けるのハ何でケセ  
ウ。蝟 随分趣向次第で同意もするが、草盧坊の脚案で薫子公や齋松齋が、  
自分極めの役割ハ不承知だ、此八笑ハ平等に役を付けて、不公平の無いや

阿房曰茶番  
ノ相談ノス  
ラ新古ト年  
功ノ如何ヲ  
論ス知ンヤ  
ニ於テチヤ  
マ

砂利生は日  
英合併ノ驚  
語ハ用ヒ得  
テ新ラシハ  
ムヲ知ラハ  
語ヲ知ラハ  
ルモノ、左  
ホドニ感ヲ  
ザルベキヨ  
併シハまづ  
ン又ハまづ  
テ比スレハ  
高尙ニシテ  
甚ダ趣キア  
リガハあめ  
んどチあめ  
あこトト  
間違ヒベツ  
ぞチはたど  
同一ニ思フ  
ヤウナ先生  
ハ外人ニ向

うみしたら賛成しやう。籠八笑共同の俱樂部ぢやからノウ、

蝸入道と籠城將軍が苦り切つたる返答に一座の少しく不興で見えしが、草廬坊首を捻つて、蝸入道の言は兎もあれ、籠城將軍の千住の居残りには、八日間行燈部屋に辛抱しただけの功で、八笑の俱樂部に入つた新參がと、言に角の立ちかければ、蝸入道酒氣十分の勢ひ克く、何を小癪なちよこ才など、年始會場忽地に、拳の雨のふ降りあらんず涼状態を、マア〜待つて、ソリヤ御短氣な小皿一枚踏割つても、損は威が頭分り、静に〜と齋松齋青眼兒共に、双方仲裁すれば、火の手ハ薫子公に移らんとするをも、首尾克く揉み消し、握み消し、元來水魚の洒落黨に鎮火も早く先誰なりとも提出の趣向を聽いて評すべしと、鳴も静まり草廬坊の、重々しげに咳一咳しつゝ、滑稽上茶番の脚案をぞ陳じける。

草當時改良風が東西南北より吹起り、上下懸つて改良の時勢に後れ、流行

を外してハ俱樂部の名折なれば、吾黨の以て主義とする處の滑稽及び茶番ハ勿論風流的茶氣的即ち洒落客にも、改良を施さねむならぬテ、(文ロー〜)ゑ氣が付かれやシタも古〜、蝸コリヤ黙つて聞くべし)夫で此節流行の獨逸を初めとし、英吉利、佛蘭西、伊太利亞、和蘭陀、露西亞、亞米利加、埃地利、白耳義、西班牙、ハ、漸パン〜獨逸のパン、交つことなしヨ〜ズット、繼めて、歐米各國の洒落を普く視察するといふのは何でケセウ、随分洒落れてる論、だらう、蝸、面白い八笑打連れて、彌次郎庵、喜太八齋と歐米を試みるといふ譯だ、劇西洋豚栗毛も古いのら、僕が校正して改良しやしう、劇通人の改良は廢めて貰はふ、都て原本の方が、大丈夫だから、番八笑揃つて出掛ちやア、無盡藏の金庫でも無つちやあ、續かないか、二三人づ、追々に繰出したが宜らう、草、齋松齋の經濟家だけに、直ゑ氣が付かれた元來齋さ、二人づ、四季に分けて、順番に押出すと

フチ試用ス  
ルノ滑稽ヲ  
出スベシ  
塾堂曰歐米  
ノ巡遊徒勞  
ナラザルヲ  
祈ル

朴巷曰財政  
ハ喬松齋ノ  
擔任ナルガ  
如シ過不及  
ノ斟酌宜シ  
キヲ得ザレ  
バ俱樂部ノ  
安寧ヲ如何

砂利生日英

いふ方法で、爾うして第一番の蝸入道と西洋不案内の籠城將軍を人撰し  
たが諸君の不同意でゲスカエ、...、皆々大賛成、...、草歐羅巴でも豚太や  
不返瀆なんぞい、共に教を請ふに足る大淺博士サ、蕪是で事が極つた、  
大業に送別會を押附き、世間億萬の俗物共を驚かして遣りたいもんだ、文  
洒落人が茶番探究滑稽上視察として、歐米を巡回するなんザア新し  
い、日本も進んだものだ吾曹などか行つた日には、巴里や倫敦は地獄の相  
場が狂ひやス、エ、...、蕪う風呂敷ばかり廣げすと、送別會の廣告の  
定いかい、文其邊の一切萬々大承知、古今未曾有千載一遇の大茶番、頗ぶ  
る盛大に遣りやせウ、蝸女の相場を狂わせつこなく、文才子には譲らない  
が、女の子に可愛がられると肝腎要の、探究筋が留守になるから、...、籠  
城將軍といふ女嫌ひか同行なら大丈夫だ、送別會の事の我輩が一切  
擔當しやう、場所も會費も定めて報道しやう、劇餘興は僕が、蝸改良歌舞

伎はモヲ百年をかり、御免を被ふらう少々位のね禮のしても、...、劇  
い涉揆揆だ、皆々輿論々々ハ、...、草併し洒落滑稽上の視察と  
の廣告も出来まいがナア文才子蝸ナアニ大業に西洋風俗の視察と觸れ出  
すべし、文然り、歐米各國の風俗視察の爲め〇〇、〇〇の両君来る何  
日出發と廣告だけ、大真面目、生真面目、平規帳面の廣告をしやせウ、草  
夫で先主任者が取極つた、...、  
滑稽洒落の視察してと、いよく蝸入道籠城將軍の二人派出と定まりけ  
れば、出發の日取りの定るまで、先づ秘密々々と互ひに誓言し、夫より別  
段異りし趣回も無く、此處の宴會彼處の視宴と、明ても暮ても酒の氣の脱る  
日の無く、只太平を諡ひて日を送りしが、サテ一月も過ぎ二月も暮れて三月  
一日の府下各新聞紙へ、四號活字と二號活字を以て、左の廣告を爲したり。  
〇〇〇〇兩君大いに時事に感ずる所あり西洋風俗の視察として來る三月

雄欺人作者  
亦欺人

三日横濱解纜の源船にて出發に付き明二日上野廣小路〇〇樓に於て兩君の爲めに送別の盛宴を相開き候間有志の諸君の同日午後六時までに會費金二圓御持參にて御參會有之度候但し御參會の方の本日中に左の兩君へ宛て豫じめ御報知可被下候也

三月一日

幹事

〇〇〇〇〇〇

于時三月三日午前九時三十分新橋發の瀕車ハ横濱に着し、上中下の乗客ハ思ひくりに車を下りて出る中に八人連の一群あり、各自に小き革囊を提げ、洋服あり和服あり其打扮を察すれば、遠くハ京坂行き近くハ杉田金澤行き、顔色の何となく不取締なる、尋常の學生官吏商人の類にあらず、況んや冠らずに紳の字と官の字を以てするおや、宜なるかな紛ひな兒氣樂人、世を茶にしても慾にハ抜目なき、ハ笑生が歐行の啓行なり、ア、怪しい哉。番我輩の財政何と妙だらう、會費の中からピン（上前を劖る主義）を

飲堂曰危イ  
哉欺理財家

行つて、〇〇樓の拂は來月末まで延す、往復の洋行費が十分出るといふなぞ、實に巧みなもので、我ながらに感心ツ 僕ならピンでハ無い全で懷中へ入れの、お拂ひは追ての沙汰、間違つたら勘解に出て月賦にするツ、草ひぬ奴マ、頃日極めた時刻に出發すると、横濱まで見送るなんかんと、解さずやが來ると困るから、一列車線上げとは凄いな寸法だが、横濱の休憩は何處よしたものだ、〇〇樓の暮の勘定が残つて居るから、迂濶にはお立寄御無用マ、文 〇〇〇ハ、劇僕が少し、劇通人何したのだ、劇少し、の一件で、然う差合が有つてハ、〇〇庵なら誰も宜らう、何處でも宜しい 評議漸く一決し、〇〇町の〇〇庵をお假屋にして、ワイハ天王の御興いよ、此處へ下り、入らつしやいをキツカケに、八人がドヤハ二階ハ打通りぬ、火桶出で茶來り、菓子を持來りたる年齒なる女中は、皆さま大層お早う

入しやいまいし、今日杉田へでもお越してございます、お舟やお辨當の汚用意りと委細萬々心得て、祝儀を狙ふお世辭をば、道路の打水と一般満邊なく蒔ぬがら、客の顔をツラリと見回しぬ。

女

オヤ、マア、貴郎の、(少し目を瞞らし)本等に實に酷いお方でござ

いますよ、欺して指環を持つて行ておしまひなすつてサ、人間違

いたらう、僕に知らん卿を見たこと無いが、無いもございませぬ、

湯島からわざく木挽町の温泉まで連れて行つて、お忘れならやます、

白梅の香をございます、それは迷惑僕に知ん目、何だ露見した

らう、姉さん一体何した譯か、何の斯のつて、白梅の矢場に居りま

はとさ、巳の池の端茅町の、彼のふ寺に居る、薰子公といふ通人だつ

て、嬉しからせばかり言つて、木挽町の何の温泉で、何でおついでいます、

其上勘定の不足分を、お立替申して置いた上に、指環を一寸貸せと仰しや

深眠日指環  
ノ小ナルモ  
掠奪セハ即  
チ掠奪ナリ

つて夫切り、何遍お寺へ参つても留守ばかり、おつかひなすつてサ、口惜  
くつてくつてくつてくつてくつてくつてくつてくつてくつてくつてくつてくつて

と掴み掛らん權幕に一同の呆氣も取られ、薰子公は小さく成り

初日の出の時の復讐だ、薰子公人を呪はば穴二ツだ、委細解

つた此處で、彼是云へれちやわ威が困るから、屹度お前の腹の癒るやうに

きるから、吾曹が引受けたから、歸るまでおは顔を立る、夫より早

く酒を、屹度宜し、受合つた(女中の漸く立つて下へ行く跡よて)

辨當と船の準備をさせ、都て杉田の歸りにと、云つてたいて、勘定の船頭

へ渡し途中から、出し抜くといふ策り、勘定だけの直にしても宜いだら

、薰子公何の状だ、約束の錢も遣らず、指環の巻上げな

んさア、俱樂部の名譽を汚したものだ、此樓の勘定は脊負せやうぢや無し

かい、然りく、當然のとだ、汚馳走を極つたら拙いヒーに願ひたう

阿房日賢者  
モ一失デケ  
スカラ餘リ  
攻メ玉フナ

塾堂曰酷い  
ノ二字蓋シ  
作者ノ意ア  
ル所ナラシ  
手

砂利生曰小  
災攘フテ大  
難來ル怖レ  
ベ々々

ケスな、ア、是で元旦オツと大晦日の夜に巡査の小言を喰つた腹が癒せ  
た、蕭々、面の皮々、酷い目に合せるぜ、エー朋友甲斐も無い、皆々、  
、、、、、  
此時遠に此處々々、オヤ、く、爾うでございませかど、男女の聲の喧しく、  
ドヤ、く、二階へ上り来り、ソレ何だ今聞えたり確に其聲だど、思つたら間  
違ひなした、八笑揃つて居るとい、好都合々々々。

× お前さん方は出の好い人達だ、洋行する錢が有るなら、下宿料も夜具の  
損料も只た今拂ひなせ、大弓場へ来て二圓の三圓のと、借を拵へなが  
ら洋行するも、克く出来た平常大層らしく、太平俱樂部の八笑人とか七變  
人どり、御大層臭い面をして、サア拂ひを貰ひませう、マアお前方の飛  
んでも無い、此先の無い婆さんを出し抜いて、モシ、、、五圓に利足が三月  
で七十五錢、跳利と手數料で五十錢直よ返して呉んなさい 西洋料理

が利潤つても無代で出来たモノ、去年の秋から溜つた分が七圓と八十  
錢、、、、洋行するのの虚だ、新聞に例々と廣告してゐきながら  
四人の債鬼一時に詰め寄せ、疊みかけての居催促、之に倍した八人の互に顔  
を見合せて、鼻には口を開かさりしが、上座に在りし草盧坊、是非なく答辨  
の任に當り。

草 爾うつるべかけて、責られちや返答をするとも何も出来ない、洋行も何  
もしやアしないから、少し静かにして呉き、爾う大きい聲で恐れ入りや  
スナア、洋行の種を明すが斯うだ、、、、此青眼兒を初め、オヤ、く、貴殿が  
誓願寺様でございませうか、毎度お施餓鬼やお彼岸には、お参りを致しませ  
が、今日お初にお目に掛ります、何してお上人様が此様な人達と御一所に  
、、、、文 オイ、く、お婆さん、誓願寺の和尚さんでは無いヨ、此人の情婦と云  
つても越後や薩摩の蕪布では無い、情婦がえいお前の子だから何うかし

庚嶺見日青  
眼兒ノ趣向  
今少シク工  
夫アルベシ

てお呉れど、擔ぎ込んだ木魚を、オイ来たど受込んだら、破裂して出た兒  
が紅い髪の毛で青い眼玉の兒で有たから、青い眼の兒で青眼兒といふの  
だヨ、爾うでござんますか、お寺の和尚様かと思つたら、口の利き損だつ  
だヨ、皆々、ウツフツツハ、ハ、ハ、草を他へ取られてしまつた、同一  
で何か世間を騒がす遊戯といふので、蛸の様な顔をした入道殿と居殘の  
大將が洋行と觸れた趣向で、實は是から舟を雇ひ杉田の梅を觀て、横須賀  
見物をする所存、瀛車に乗つたり舟に乗るから洋行と云つたホンの洒落  
サ、第三の列車だと君達の様な生真面目連中が、停車場へ羣つて趣向ケ流  
れるから、一車繰上げて出し抜いたと見せたのも趣向のうちサ、まあ安心  
して一杯呑み玉へ

洋行のーらせすぎ田の梅見づれ

入道

これも世間のあけ威すなり

洒落なるとの四人にも漸く解り、前以て内々話しが有つたら此様なに騒が  
ずと濟んだものをもと、一座ハ笑ひの聲に賑はしく、既に十二時も過た伊勢山  
の鐘ハエーンエーンゴン帳場の時計ハホーンボンボンと三時を報じ、杉田行  
も中止先當年の失敗初めも是にて濟めば、めでたしく、是も偏へに洒落的  
の擴張と、債鬼の闊戸面も馳走の酒に地獄面と變り、打連れ立ちて共に東京  
へ歸り來りぬ。

夏 避暑の旅

富岡の競游泳  
大磯の救助船

春も稍景色と、のふ月と梅、其觀梅の催しも、飛んだ箱道が舞ひ降り、横濱  
で破と成り八笑揃ふて、惜々と東京へ歸りし後は、花よりも酒なくては太平  
を謳へずと、日毎飲みてハ暮し明けては飲み、狸舞やら天手古舞、具樂府  
の繁昌打續き、目に青葉山杜鵑初かつをさへ出で來ぬる、夏もハヤ土用の中







朴巷曰劇通  
人隱遯ノ策  
ヲ東海ノ散  
士ヨリ得來  
ル

避暑の旅と出掛やうぢやありやせんか、兎も角も劇通人が方寸の智慧を  
を開いて、廣告文から聞き取らうと、劇いよ〜孔明の錦囊を開くと成  
りやしたか、新聞の廣告は春の梅見で大味噺を着けやしたから、今度のズ  
ツと俗物の目を晦まして、我黨が跡を隠すといふの、凄い計畧でグッ  
火遯でない水遯、、、水とんなら昔馬道に名物が有つた炭團なら横  
町の荒物屋に、折角孫呉の計畧を説く所だ、横矢の暫時發行停止たヨ、  
劇いよ〜今日の聴衆ハ騒々しい、諸君ヨ諸君僕が水道の術を以て、盛遊を試みや  
うといふの、先廣告ハ斯の如し、文案を懐中との深い巧みだ、朝讀  
〜(此間に劇通人懐中より何やらん巻物一卷取出せり) 夫れつら〜  
惟んみれば、なぞ、前文ハ抜きでいよ〜此處ハ聞きに達します、新聞  
廣告案、、、隱遯の廣告〜〜〜、吾黨近日大いに俗事を厭ひ都下熱  
關の紅塵を避けて東海の濱三保の松原に自今隱遯する事を世に公けよ

春圃曰隱遯  
後ノ計ヲ如  
何トス

知己の諸君陸續來訪あれ、、、太平俱樂部拜告、、、文高うかにこそ讀上  
げけれ、、、大出來々々々草盧功速かに實行すべし、拙が草盧も其不  
在中又修繕工事を急がせやセウ 本堂建立がいよ〜出來るかエ、本  
堂ハ來年で今年ハ庫裡だけだと云ひやス、極つたら善は急げだ、皆々支  
度々〜  
いよ〜避暑の旅行と相談が決まり、翌朝の新聞紙へ隱遯の廣告を掲げ、新  
橋より瀟車に乗り、梅見洋行の失敗に懲りて今度は直に舟を雇ひて、富岡の  
海水浴場へ着し〜何とに、然るべき宿を一軒探し出し四五日の逗留を頼み  
しに、避暑を兼ねて海水浴の客も多く、何れの座敷も一杯で足の踏込む所さ  
〜無きを、漸くにして家内の居間を開かせ、八人に入疊敷の一間を借り切  
り、其夜は勉めて靜に臥戸に入り、翌朝となれを何れも澄して、紳士連の潜  
び旅行といふ風を仮粧居たりしが、隣り座敷の客が太平俱樂部なんといふ

阿房日人ノ  
見タホド氣  
樂デハアリ  
セン

もの聞いたとが無いが、妙々廣告ぢや無いの、隠匿するに廣告は入るま  
い、お負けに來訪のれ餘ば道化ものだ、氣樂な人間も有るものだど、彼  
の新聞紙の廣告を評しながらの笑ひ聲、聞か付けては燕子公、紙門の隙より  
密を覗きて、聲を低らし草廬坊が耳に口寄せ、何か頻りに密詰きて七人へ語  
り傳へしは、内所咄しの事なれば、作者の耳にも入らざりけり。

何でケス屹度俗物を驚がしやす(ト口へ手を當て跡の小聲で)美しくい  
年増が居るツて、、、其處が揃つて赤い慣鼻極で、抜手を切つて歸つて來  
るといふの、大切が派手でゲサア、文才子が醫師で釣を垂れてる、其側  
で草廬坊が筋を反して沈まうとするのを、醫師の船が來て救ひ上んと、醫  
師が出した手を以て引込も、、、幾干浮袋を背負つて居ても、水中へ引  
込れり恐れ入つた、願ひ下やセウか、、、此家の勘定を背負ひの有がたく  
無い、同じ背負ふものなら、、、仕方がない浮袋を背負ふか、變が

なくつても宜い、船頭への僕が附添つてゐるから大船へ乗つた氣で、夫で  
も實際乗る舟の小さいから、恐れ入りやす、我々大勢が警護の役に立つ  
から大丈夫だ、船の出盛る時を計つて、午後四時三十分を六序の幕明き  
としやセウ、夫までの白河夜舟で、午睡でもしやうり

何なる催得しかといふふ、海中程克き所へ文才子醫師の積りにて、釣を垂れ  
るお傍らにて、草廬坊が青眼兒、喬松齋と共に游泳を競ひながら、速に筋が  
反りて沈まんとするを、先へ行越したる兩人が助けに戻る、其前又文才子は  
船頭の燕子公と共に、救はんとするを水中に引込む、船頭も續いて飛び入  
り、文才子の浮袋を背負ひ居て、水中で衣服を脱せ、他の四人も共に、八人  
揃つて戻り來るといふ、危い趣向の八笑人の卒八が兩國橋より身を投げた  
よりも、最一層拙なと思ひ付きなり、既時刻とも成りければ此場の作者劇通  
人が先に立ち、夫に續いて草廬坊、蝸入道さんと河童相傳の面々、馴しの爲

塾堂曰天慰  
勞ノ酒樽ヲ  
賜フ阿々

めにと海中へ踊り入りしに、折りしも男女の浴客の今三人が紅の犢鼻褌  
して、遊を出しを見るよりも、皆呆氣に取れてアレヨ〜と賞め立る聲堪ら  
ず、青眼兒喬松齋も續いて紅の犢鼻褌とナラ付せ、遊を出せし沖合に、蓋  
子公船頭の役、文才子の帯を解きて、怖く此方を眺め居たりける。

草 何だか樽が流れて来るが、開て見やセウか、沖に難船のありそな天氣  
でも無いが、三ッ割との強氣〜 金毘羅大権現も氣が利いて居やス慰  
勞の御酒下され忝ぢけない、草 イヤア、ベツベツ、プツプツ、ム、臭い  
〜石炭酸だ、大變々々 皆 石炭酸だ、大變々々逃ろ〜、草 失敗つ  
た〜

驚き慌て〜六人の一生懸命泳ぎ戻りて、陸へ上る容子の尋常ならず見え  
るにぞ、蓋子公文才子も何か失敗の出来しなふんど、急ぎ船を漕ぎ戻し來れ  
ば、他の浴客連も頻りに騒ぎ、上陸するより仔細は解らば、何か異變の起り

しならんど、宿へ歸れば彼の借切の一室には、六人が只ツイ何氣なく、  
實に何うも〜と言ふばかり、村役人らしき男の談判するにぞ、いよ〜不  
審と其座に列なりけり。

村役人 ハア、此處を何と思つしやる、只の濱だと思はつしやるとエテ一丁  
箇が違うだ、昔は何でもね、村でござつたが、當今ナアお前方にお見上申  
すとも、成んねエ伯爵様方がお邸さアお建なすつて、縣知事様が同等のお  
交際サ成さるほどのエレエ方々が、斯うやつて海水浴に、ハアござらつし  
やるデ、此村もエテア位が上つたマア、衛生の事もハア戸長様から、御布  
告ナア下つてやかましい處へ、金澤で野蠻な野郎子が類似虎列刺に罹り  
くさつて、不潔物サア海へ押し流したアで、巡查衆が御派出ござつて、悉  
とくハア御吟味相成る所へ流れ着いたで、引上へエと思ふ處を、不沙汰で  
蓋サアぶつ開いて、寔に飛んでも無エとをござつしやる、金澤の戸長様へサ

深眠曰村儂  
ノ談判寫シ  
得タリ可笑  
往々是等ノ  
實況アルヲ  
見ル  
又曰村儂侮  
トル可ラズ  
遂ニ敗テ海  
濱ニ招ケリ

朴巷曰正直ナル哉老爺  
お地頭様時  
代ニハ袖ノ  
下ヲ受ケタ  
ルモアル  
ニヤ

阿房曰イヨ  
瓦解シ  
ヤシタ

ア、此所へ中すから、此處を立つしやるナ、草を開いたのは、寔に悪うケ  
スガ悪意でした譯で、有りやせんから其處の所は少く位は、極内々で  
、、村役人 ヤア成りましねエ、袖の下の賄賂の、地頭様の時勢でハ  
ア、此節は内濟なんざあ出来やしねエ、昔どの村柄がハア違ふだアから  
子、聞くと成りましねエ、晩まで待つしやれ、  
田舎漢の無一刻、己が言のみ演ひ立て、立歸りしより八人は、互ひに顔を見  
合して、暫時と一座無言に、目たさの音をかり、バチーリ、  
草入道、燕子公安閑として居られやすまい、劇、いかに文才斯く行く先  
々に新敗失を出来して、到底道々の滑稽覺束なし、、家康公伊賀越と  
ひふ御難場に臨んで、夫所ぢやアない、村役人の來ねエうちあ、劇、道化の  
祖師が八人も揃つてるから、辰の口の御難位、有る苦サ今に大雷大雨で、  
村役人の心も刀刃斷々壊と成りやす、騒ぎ玉ふナ、爾ういふ中にも氣が

急れる、是より直ハ鎌倉に出で藤澤より瀨車に乗つて、函根へ船籠らう  
ツ、落ん、何でも宜いから早く、、、斯うも有るかエヘン

蓋開けてこれほと人の鼻つまみ 蓋子公  
いつでも失敗に富どりの浦

ドタバタと身繕さへ締りなく、水鳥の羽音に駭く平家の軍勢、鳥羽伏見と徳  
川勢の敗軍も、斯やとばかり周章狼狽、我靴の鳴るにも心置れつ、何れを  
夫と指す方へ、足に任せて走り、、、、(三重)  
行く空の急げばいと、掛らぬ夜道を辿る八人連、怖さをかした堪えがたく、  
案内知らざる山坂を漸き、こゝよ小綾陶の遺傳へ、大磯驛へ着きにける、ヤ  
アデン、

蓋子公十八番のデン、が出るやうな元氣になつたかい、此處まで  
來れば大礮石、義太夫でも新内でも、夫だけの、お預けにしよう、大磯

庚嶺與曰青  
眼兒ノ博識  
ナハ俳諧マ  
デ附會ス

の景色ハ又格別だ、此滞留館なんざア、素ばらしいぢやありやせんか、青  
滞留館、此處と禱龍館と云ふんだ、逗留も滞留も、日本語と漢語と違  
ぬだけで同じやうな事てグス、青、ウツフ、ハ、ハ、ハ、日本語も漢語も無い  
もんだ、禱龍と書いて禱龍館だ、昔し大磯の虎御前が、情人筋の曾我の  
十郎に、敵祐經を打せたいつて、討入の夜ハ雨の降るやうにと、龍宮の乙  
姫に祈つた故事から、其夜降つた雨は虎が祈つた雨で、虎が雨と云ひ、此  
處を禱龍の濱と名けたのだ、草盛坊御坊と俳諧師だが御説ハ有りあせん  
か、草盛の正風で公等の様も、附會俳諧でハありやせん、劇通人曾我  
に縁の大磯だが、曾我も虎も腹が減つては敵が討れやせん、何か早  
く喰ひ、オツと来り兎角戦といふやつハ腹が減つてハ出来ぬやつサ  
（此内追々酒肴を運び出る）相摸灘から白泡を立て打込も浪を能く遊ぶ  
者が有るか、本館の開業式から来て、僕は海の模様ハ悉皆知つた、

ぢやア河童だ、青、ナニも居るよウハ、番陣が足まれば是  
から此方の腕を振ふら、何しろ有がてゑ、家が新らしくつて、喰  
物が甘くつて、是で八笑お揃ひで御入来下されまして有難い仕合せ、ホン  
の館主が御禮心にか何か云つて冠り豎に振る相摸藝妓を二三人、お  
遣ひものと来りやア中分の無い奴、相摸と侮せられないヨ東京から出  
稼ぎが有りやす、籠城子の何した、ナニ風呂へ行つた、水へ入る先に立  
つて湯でも有るめゑに、文才子下戸の口前を見せ付けに食つて居す  
と、トン、トンと音じめを入れる、樂隊を周旋しやせんか、地でも旅で  
も構ひやせん、姑らくありて、兩人の藝妓ハ袴で、パタ〜と廊下を來  
る足音を聞き付け、東京藝妓だと女中、大層に躰込んで来たが新柳二  
橋の流れを汲んだ、ウハ、ウハ、ウハ、文才子の邊に立て、次の室へ轉  
げ込むを夫と知らぬ二人の藝妓ツト座敷へ入来り、△チャマア、お揃

ひで……何して妾達の居るとが知きました、ナヨイと彼の文ちゃん  
 ……文ちゃん……(文才子漸ら次の間から、這出し来れば、居たの皆  
 さんがお揃ひだのに、御前んんの居ないとは思ひと思つて……) 山を掛  
 けたら出たよ、去年の函根の湯治へ、連れて行くなんて欺くらかしてサ、  
 本等に憎いヨ今日何か奢つてお呉んなはいいよ、爾う自分の事ばかり  
 饒舌つて居すと、酌でも爲て呉れや……草、おてことおはやが居やうとの  
 思はなかつた、赤坂も流行ないのか、青、爾うぢや有るめエ、子宮病の療治  
 代を稼ぐんだらう、△其様な悪口を聞くから、青い眼の兒が生れたりな  
 加するんだヨ、皆々ハ……、籠、イヤ魔物が出現した、□お前んん何處に  
 隠れて居たの、俗物どもが蒼蠅うら、俗垢を潮湯に流し來た、何しろ  
 お囃子の鳴物が出来たら、何か一ト幕書下したい、お饒舌の跡に回して一  
 トシヤギリ入れやナ、

是よりあてておはやが三味線に、一座の沸くが如くの大浮れ、元より隠し藝  
 なんど少しの有る連中なれば、海に響か山に應ふる濁聲張上げ、甚句活ばれ  
 の總まくり、皿を叩き鉢を打つての大騒ぎ、折から本館の下女の廊下より、  
 敷居の際に突立ちあがら、

女 お容様向ふ座敷に、昨夕から病人がおざりますから、些少静に爲すつ  
 て下さいと、帳場からお願ひ申すヨ、

と女中の一ト聲一座宛然木鍛工場の一時に工を止しが如く、忽焉鳴り停  
 まりける。

草 復失敗ハ……、文、誰か此高濤を泳いで向ふに見ゆる、彼の岩  
 まで行き着くものよ、太磯の虎が流れの末を汲む高敷御前でも何でも、  
 一ト隣吾曹が奢りやせり、文さん……お約束の其緒の玉をお呉んな  
 はいヨ、お前はん口ばかりでヨ、此浪を泳いだら奢るなんて、夫も虚だ

朴巷曰英國  
水練法速  
大磯コ移  
可ラバ潮  
流波浪自ラ  
異ルアリ

阿房日連中  
一同行生ノ  
痛サハ一主  
堪ユルチ居  
義トシテ居  
ヤスダロウ

ヨ、子供さへ泳ぐ浪だもの。△姉さん會つたが百年目貫つておしまひ、此  
 入達の本等に油断の成らないヨ、……だから些少でもね、……お鼻薬り、……  
 ア、○本等だヨ、……此方の事、ア、作癩てハ厭ですヨ、……(ト口を押へて)  
 又叱られると、いけないヨ、暑い……オ、暑くは堪らん、蛸入道文  
 才子が大磯の美人を賭けるといふから泳いで、徳利を獲かして遣う、蛸小  
 瀬なカ主の腕との鍛が違ふぞ、僕なんぞア手と足で浮くのぢやない、鱧  
 と尾で遊ぶも同様河童が年々所得税を收めるヨ、英吉利新發明の扳手、  
 他に類なしといふ水練家の前で廣言の少し片腹が痛いね、水練の事なら  
 壘の上で論じすと、彼の浪の上へ行くべしサ、僕の教育を受けなけりや  
 ア、日本で水練家とは言ひ悪い、僕ハチャアンと實地經驗で、龍宮の乙  
 姫から運上を取つて、魚族へ水練の傳習をして居やす、文才子ハ大分議論がむづ  
 かしい、劇り、理論より實地がチ、……マア議論をしないで誰が上手だか

泳いで御覽なはいナ、若しアツクくをしたたら松本先生が本館に在でサ  
 アチ、命が無くもつても貴郎方のだから妾は構はないヨホ、……、草  
 爾うだ、……、此道樂猫奴ら勝手な事を言ふナ、誰でも先陣を走る奴  
 が有りそうなものだ、効能澤山の喬松齋と青眼兒、……、宇治川の先登を  
 遣るべし、文才子も得意の平曲宇治川の段だヨ、吾曹は陸に居て着到  
 を記しやせウ、梶原どの馬の腹帯が緩みますぞ、馬ハ其方だハ、……、  
 文才子、何れ劣らぬ磨墨池月太く逞まじそらだ、……、ノウウおてて、□△馬が有る  
 から見せ物に成らないんだヨ、女中、姉さんお迎ひ、△ハイ有がたう  
 喬松齋青眼兒は互ひに水練の自慢より、いよく高浪を游泳競と事が極れ  
 心、藝妓をば迎ひの來たを幸ひと返した跡で、富岡の失敗を紀念の緋憤鼻  
 細文才子は、一人陸に止り七人の優劣を檢査の彼、一同浪際に立寄れば龍城  
 將軍蛸入道夫に續いて薰子公劇通人暫く浪の寄せ來る狀を打詠め、躊躇と



見えしが草廬坊が真先に、返す雄浪に身を跳らせ、抜手を切つて泳ぎ出るを  
 喬松齋青眼兒が来い来いと移術を尽して遊ぎ行くを、草廬坊は少し離れ  
 て詠め居ながら、頻りに快を呼びしかば陸に残りし面々も追々海中へ跳り  
 入るにぞ、最前より岸邊にて静に浴し居たる男女一所に群を爲し、危嶮を冒  
 及人々よと嘲るもあり、技量の程を賞るもあり、又善遊ぐ者は溺ると古語を  
 引いて危ぶむもあり、孰れも沖に出でたる三人の安危を評し、跡より出し四  
 人は如何に爲まやと見てあるを、彼の取殘されし文才子が、吾一行の水練に  
 達したると豈管蠶の上のみならんやと、云いぬばかりに鼻ヒコツカせるも  
 をかしかりけり。恁有折から青眼兒が叫ぶ聲の幽かに聞えて、漁船一艘船を  
 押切つて來ると見ゆしが、程もなく彼の三人を乗せて漕ぎ來るより、途中に  
 在りし四人は只事ならずと急ぎ引返しけるに、續いて彼の漁船も漕寄せつ  
 へ、草廬坊が早く先生を、と叫び呼りしよりスワ大變と、文才子は本館差し

塾堂日學理  
 實驗相待テ  
 初メテ安全  
 ナリ

て一目散、濱砂蹴立て走りゆく、見物人はソレ見たとか、生兵法の大傷たら  
 うと、密に罵しり笑ひける。  
 船頭 危ねエ事でありやした、ハア此海サなか／＼お前さん方の生やさし  
 い腕で、泳げるもんだら私等ハア商賣は成りやしねエや、まんだ肛門が緊  
 いから早く御先生様御願ひ申して、お療治を歎願申しなせえ、藁火でも焚  
 付けねエぢや手後れに成りやすぞ、私等は沖に漁がありやすで、今ハア肝  
 唇な時ダア、マア大事に、ナアコ、ハア其様な心配は入りやしねエが、  
 折角だア貫つて置きやすベエ、コレエ濡さんねエやう又、肌へ着けて持て  
 るダ、アニ壹圓ダア、壹圓で助かりア安い命さ、ナアコ此方の事だお大事  
 にさつしやりませ、大勢其樽を壁にぶるんだ、爾う／＼腹を押して、大丈  
 夫ダ、ハ、喬松齋、ハ、喬松齋、ハ、息も無いものを呼んでも聞ゆるもの  
 がサ、腕に無い事を圖に乗つて、ハ、危いと思つたが遂々拙を現はし

た、見物人に對しても太平俱樂部の耻辱だ、岸の方でボチヤ〜遣つてると、間違ひは少い奴サ、文才子はなら奢らずに濟むだらう、有がたい人の苦しいの三年でも堪へヤス、高見て詠めず、見物に見えないやうに何か、方法が付かぬエカエ、文才子、斯う見とらされてハ感伏しやせん、

藪火を焚け水を吐せろ先生を呼べと、大騒ぎ生憎松本先生ハ東京へ行つて不在なれば、大磯病院へ人を駈せ、醫員も出張して薬用手當を爲せしほど、喬松齋は夥多く潮水を吐出して漸く蘇生し、ア、苦しい、海中の水練ハ、モチ止めた、ア、苦しい、ア、切ないものだ命が、と聲も出て口を听くより一同も安心して、借切りの座敷へ身き來り、枕元に居並び、薬を服せ粥を啜らせ介抱するも、了得ハ同じ道化連、殊勝なりける次第なり。四五日逗留なして喬松齋が身體も健康舊に復しければ、此失敗を紀

深眠日失敗  
未マ手軟  
ラカキヲ覺

念の爲め土左衛門と改号し、春の催はし梅觀洋行の夫敗を回復さんと企てし遊暮の旅も、草盧坊が排泄物の樽拾ひから、文才子がかてこ秘派の緒バを奪れ、最後に喬松齋が波上の曲藝、危くも龍宮へ婿入を免れて、數多の見物の前に大耻辱を被ふり、前代未聞の大失敗此失敗を、東京へは持歸られずと、是より極々生真面目に八古根七湯を、一口づづ遊びて八日目に、恙なく東京へ歸ると大磯の一件、早くも東京又知れて隱匿者の踪跡も分り、喝采と思ひきや大笑ハれの種を下し、劇通人が智囊を開きし折角の大脚色も水泡に属して、大磯濱の荒浪に打櫻れしこそ、氣の毒にも亦をかしけれ。

隱匿と人にな三保ほうそのかは 喬松齋  
まこと危き目にぞ大いそ

秋 野分の跡  
田家の暴雷雨  
別荘の俄演劇

東京市區的繁華を距り、南葛飾の邊いと古たる衝門の扉も朽ちたる田家の  
奥、笑ひ罵る聲の喧しくぞ聞ゆる。

草此雷雨でハ出るも退くも成りやせんが、今宵一夜を此のあ、ハッ、ハッ、ハッ、  
殖生の宿に明をといふとかサ、(ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、  
、ビカリ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、  
鳴り立られてハ堪るもんぢやアない、ウ、又光つた、ダカラ幾千條約が有  
つたつて夫の改正して、今朝の空合に出かけるなんてエな、天文博士の寸  
法でないぞ云つたのを、(ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、  
から故々日蝕を見に来て、降られて返つた果報者も有るからッて遂々連  
れ出し、斯様な所へ押込んで酷へヨ、恨みだ、ア、又鳴るの、然ら恠々す  
るとハ無いヨ、落ちたところか君の命を取るとハ云はない、何うだろ知  
れぬエ、昔のら雷に打たれて死んだものもあるからぬ、杉皮の庇が朽ち

塾堂曰條約  
改正ハ手際  
公ハ出来サ  
ニハ出ナリ

朴巷曰夕雨  
中ニ人ヲ弄  
ス雷公モ亦  
洒落モノナ

て裂けた所なんざア實に閑静で、簷渡る月を寝ながらに詠めるとは風流  
だ、風流も洒落も斯うゴロついてハ、何だか氣味が好く無い、蜻蛉入道ハ  
獨りで恐惶がつてるぜ、斯う揉める空合が僕の見込みだ、此雷鳴の響き  
なんてエのハ、實に前代未聞の好音がする、最、鳴れ、意地の悪い  
奴だ、何と無く氣味の悪い天氣だ、天氣よりも天文が天降つたから(ゴ  
ロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ、  
落たとへ、何處へエ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
摘まれて、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
といふのハ虚でケス、何だ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
時にゴロとも何とも云はず、人間なら暗殺といふやうに、不意に來るから  
あか、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
鳴るか、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

紙間隔てた廣室に、圍爐裡に釣き茶釜の下、折焚く柴の細煙り、老婆の沸る茶を汲んで差出す向ふに、二十歳ばかりの年増造りし婦人と四十餘りの質朴なる田舎爺、外を眺めて唧く同じく此處に降り込められしものなるべし。

婆それ 其の困りでございませう、愚息も今朝京橋まで参つて未戻りませんから、お送り申す事も出来ません、は覽の貧乏家での、山吹の花でお鬨りも出来ません、蕨どころか、お貸し申す番傘もございせんが、ハア直に晴ませう、爺 ハア、ア何でござるまじや、小僧をお家まで傘を取りりに走らかせやしたが、子供といふ奴の道草へる食ひやすで、急の間に合ましねエ、左様でございますか、れ宅の何方で入つしやいませ、爺 ハア柳島の千五百番地でござりやす、半道近うございますから、小僧さんもお手間取れませう、爺 平常たら構ひやしねエども、ハアお娘様のお慰み

塾堂曰クお民が作畧ノ芝居早ク其幕明キテ見ント欲ス

又曰ク聯合ノお芝居甘ク出来ルヤ否

に今夜ハア芝居打つてゐるのに、己アハア構ひましねエが、此お民さんサア歸んねエと役者の扱ひにも困りやサアねエハア、困つた雷様だエラ鳴はためかつしやる、若エ自分かた餘り好ねエで子エ、ハア、鳴つしやるも作の爲にの好んべエ、劇大層よく、彼の爺おつは脂下つてるが、此方のお民様が素的だ此處へ悉皆持込みの、、、此大雨では誰だか知らねエが、役者だつて来る筈有りやせん、其代りに此一座を賣込まふぢやアありやせんか、不承知か子、其お娘さんが僕に、、、其奥ひぢやお娘さんも吃驚して逃るサ、直に其方へ關係のら困るよ、夫より誰か使者を派遣して其役者と聯合の賣入談が肝唇だ、賣込むト、、、彈りながら太平俱樂部とか何とか、洒落主義擴張者が此方かた持込むなんてエのの不見識ダ、不承知の人の抜きにして、一人位減たら跡の七製人で出かけやう 籠城將軍不承知なう獨

阿房曰ク娘  
サノ御病  
症カ承リタ  
イ或ハ長者  
ガ思ヒナ叶  
ヘザル疑ノ  
結ボレニハ  
アラザルカ

り歸るべし、不承知ぢやアねエがサ、マア然らぢやア無いか、文才王  
が應接に行つたト、

文才王に困つたる天氣でゲス、一貴婦ハ柳島村のヘト何でゲスカ坐間臣  
太郎さんの御別荘に居らつしやるツテ、娘さんが御病氣で夫は嘸御心酒  
でゲセウ、別に御懇意と申すでも有りやせんが、頃日や、ノ、ノ、ノ、  
、、、何で、彼の、商工會でお目に掛りやしたか、今夜お催し  
の茶番が、成、成るほど、此天氣では到底 諸藩家なんぞの此邊  
へは参りやせん、貴公方は役者で入つしやいすか、役者と申す  
でハ有りやせんが、お見上げ申した處が何も、と聞いて文才子  
ハ速に衣紋を直し少し身振りをする、役者衆といふ見上げ申されません  
が、お目がなかく、高うがスナ、役者なんぞより太層お立派で、入  
つしやいます、夫では若しやアノ、當節御評判の太平俱樂部とやらの

ハ笑方で入らつしやいせんか、(奥の間に聞き入る七人の互ひ  
に何だ強氣な景氣に成つて來たと密語合ふ) 恐れ入つた御眼力序てに  
お手の筋を願ひたいハ、、、、實ハお察しの通りで、今日少し催し  
事で、此邊まで出て参りし處へ此家前、此家に駈込んで助けて貰ひやした  
か、貴婦も、嘸お困りでゲセウ、何してハ笑進を御承知でゲス、先達て  
六磯の禰龍館へお娘様のお供で参つて居りました時、貴郎ハ泳ぎを遊む  
さないので、エヘンヘンな、、、、鋭い眼力だ、斯う何も彼も  
解れば直に涉相談申やすか、(俱の家の能く饒舌る奴たといふ風てまはま  
す脂下つて居る、縫衣裳のお準備も有るとなら、此連中で娘様のお慰み  
に、茶番を一幕興行致したいと連中一同で、) 此時仕切りの紙門が何に  
しけん四枚一度にハツタリ倒れて、七人一度にドツサリ轉げ出す、貴郎  
方ハ敷居の上へお乗んなすつたもんだから、紙門が皆な外れました、是

朴巷曰わ民  
能ク八笑ノ  
伎倆ヲ知ル  
間ニ合セ  
一言輕妙  
又曰一事ガ  
萬事土左衛  
門ノ真似ノ  
如シ

阿房曰わ民  
ノ炯眼疊水  
練ノ土左衛  
門ハ嘲シ得  
テ新

マア見さつせエ、敷居の溝が凹んだトヨ、アハ、話しを聞うつて大勢して  
敷居サ、押凹ませテ、ハ一成んねエ衆々ハ、、、民 オヤ皆さん御捕  
ひて、アノ御背の高い方ハ大磯で、頃日、、、土左衛門に成つた奴で、民  
オホ、、、貴郎ハ土左衛門様で入つしやますか、番 ナニ喬松齋と申し  
ます、アレハ土左衛門の真似をしたのです、斯う御屋か知れたら有体に  
白状しやせウ、民 チエ爺やさんモチ六時だらうが、何せ東京からは来まい  
しモチ小僧も歸る時分だから、皆さんをお願ひ申して間に合せに、、、益  
宜んべゑ私等何にも知ンねゑか、御前さま宜いやうにやらつせゑ、籠  
婆さん大勢押込んで御喧しいね、婆 ナニ寔に賑かや宜しうございませ、若  
い時分には御殿で姫様の御戀故に、お狂言のあつ、節仙代萩の政岡を勤  
めたとも、ござましたいたが年が寄つてハ否ません、今でハ斯うやつて圍爐  
裡の側の政岡になりましたホ、、、草 圍爐裡場の政岡とハ新しい、

、なか、く、咄せる、皆々 お婆さん、アツハ、、、民 お下さ  
いませなら少くも早く願ひたうござります、今日ハ土左衛門にわたり  
遊ばさすと、草 モチ仰せ無くとも足元かむづ、して居りマス、お座敷で  
致すとなら土左衛門の方は大丈夫、、、民 デモ疊水練とか申すから座  
敷でも土左衛門が出来るかと存じてホ、、、草 殿しいお詞々、、、仕事は  
流し仕上をナ、、、蜻入道役人替名を此方に御披露して置かうぢやア無  
いか、蜻入、草 エ、是が喬松齋と申しやして至つて、鹿末な借家  
の庭にヒヨロ松が一本有りやすの、此奴の丈が杉の木のやうにヒヨロ  
くと高いので喬松、、、呼悪いから齋はお負けでケス、次ハ大千仕へ遊  
興に参つた節、何で、、、少、仔細あつて取残しおたましたら、丁度八日間  
貸座敷の二階に籠城致し、潮金で以て迎ひの聯絡を通じて、歸宅しやし  
たが、此度胸なら天晴征夷大將軍に成れるだらうといふのから籠城將軍

庚嶺夏日青  
眼紅髮、借  
老ノ誓約ヲ  
取消ス反證  
トナス力アリ

と中やす、次は、面が好つて金が有つて親切といふ三拍子揃つた、或る娘様に思ひ付れ其の娘様が膨、民、ホ、容貌に好つて居らつしやいませから賑ねエ、女の方に御油断がございませぬ、草、へイ處が子實は踏臺で、全くは某外國人と親密な筋が有つて、オギヤアといふと其兒の目玉が青く、髪の色が赤く、夫から青眼兒、尤も外國人の兒と判然したので直に手切に出來ましたが、青、コウ、爾う二度も三度も、披露には及ばぬエゼ、横濱で一週云やア澤山ダヨ、草、萬事拙が方寸に有るヨ、民、ホ、お氣の毒さまのやうでございませす草、エ、次なるハ劇通人と申す芝居が大好きで、演劇改良の熱心家で、日本の芝居ハ未澤山は見ませんが、西洋の芝居咄しを聞かぢり野蠻を改良するといふ、演劇道の大通人、其次ハ口も八丁手も八丁其處は、其ウ、何で夫、次第てナ、随分其何で、口巧者に胡摩化し、祭文が甘い處から祭文を逆さに

朴拙曰世間  
ハ前座多シ

して文才子と申ヤサテド、尻のなかなか白い齒の見せられない奴で、液臭の臭ひがクンクンと蒸るに依つて蒸子と申し、是なるハ面指が蝸に似て、蝸の様な顔を致す隠し顔が有りやすから蝸入道と呼び、夫からお寺の堂所の隅に寓居をしながら大層らしく、拙が草履へサト御入茶なんかんと澄し込んで、今も拙を三度草履に顧りみる通人が有りやす、支那で古風に云へば洒落の孔明、西洋風で新しく云へば、滑稽道の比スマークでケセウと口續げに草履々々、云ひますから草履坊と申す、貴君方は昔さん學問も有り遊ばず、養生さん方て入しつて斯ういふ遊具を遊ばしましからぶ話しも面白く出たらめも能くお附合でございませすか、貸本屋の持て参る八笑人や七偏人とか申す本ハ、貴君方よりまたをかしいやうでございませオホ、ハ八人顔を潜かに見合す後の方にハ供の爺さん大欠伸、ア、エ、宜う喋々衆々、落語家の前座つちやア此奴

トのこんだべエ、ハアお前方の油揚のお菜でも食ただかねエ 失禮な事を  
 をお云ひで無い、皆さまの政談演説や討論會で、お馴れ遊ばしたのだヨ、  
 草演説が平常の職業同様でケス、(此時大きな聲で) 小僧 お民さアーン、民  
 オ、吃驚したヨ、小僧どんお前何をして居たのだエ今頃まで、小僧  
 雨が歌んたりらブラ〜傘を擔いで來たら、素的滅法な政談演説が初か  
 まつて居たから、僕も輿論の歸する所を傍聴して居ヤシ、民なん 何だねエ利  
 た風な事を言つて、小僧 風ぢやア無い正よ判然と、聞ひたねる民どん〜  
 落語家が大勢旦那のお供で來たから、早くお歸り此様なやつ、漸つと  
 雨が歌みヤシ、オホン、民 お戯で無いヨ、皆様へ只今お臨を願ひまし  
 たがお開きの通り、本等の遊人で主人と一途に參つたそうでございまは  
 折角願ひましたかモウ遠方を故にお臨に及びません、寔に失禮を  
 致しましたお陰様で退屈せずに雨合を致しました、爺やアさん、小

塾堂曰八笑  
 ノ失望想見  
 スベシ阿々

春圃曰黔首  
 モ亦愚ナラ

僧どん、小僧 是は不平だ爺やアさん小僧どんは不平でケスナアソ  
 エ、民 餘計な事を言ひで無いヨ、ホ、漸々此方の体にな  
 つた、ア、騒々しい衆だ、  
 お民は藝人の來しと聞くより、雨も歌みしを幸ひに幾干か茶代を置て、立  
 出る跡に八人お民の跡を見送つて茫然たり。  
 草 お婆さん彼の女中の確に人間かね、折々見かけるとも有るやうでござ  
 います、能も存じませんヨ、小僧 一体何の用で來たんダテ、お娘様の  
 お使に出た歸りだと申してね、跡の咄しを仕かけた處へ、貴即方がお  
 出でしたから、夫つ切りで聞きませんでした、悉皆遊ばれてしまつた、  
 全体草廬坊が變な目付で、ヘテ〜飽舌るもんだか、遂々遊ばらうと思つ  
 て先方に、冷却されたので、早くキリ〜談判すりやア、黒人が來やうが  
 何しやうが、今頃の一盃も呑んで居るのだ、馬鹿々々しい、腹んだんだ



阿房日疾雷  
耳ヲ掩フノ  
追ガアリヤ  
セ

んと云ひたいが、全く北山大時雨だ此瞬間に日の暮ないうち都へ引揚げ  
やう、今に成つて彼是云つても、追付かない、思々しい阿魔だッ、福  
さん少しばかりだが座敷代のしるしだヨ、少し摘まれたやうだぜ  
(と八人はドヤ／＼と立去つたる跡に、婆さんい銀を数へて) 婆  
マア、妙な勘定だヨ、エ、一と三十二銭、一人が四銭づつ、彼の騒た  
宜い氣なもんだ、併し今日は空合が朝かど變だと思つたら、彼の雷鳴さま  
、、彼の人達で、淋しくは無つたが變な人達が落合つたものだッ、  
大磯の失敗以來閉籠りたる鬱晴し、久々にての膝栗毛向島の七草うら、ひね  
つて耕寺の萩を見んと、碌々案内も知らぬ道を彼方此方と、聞きながら行く  
うちに忽地暴の雷雨となり、雷鳴の響き地軸も裂くるが如く、降雨の烈しき  
と、日本中のあらゆる瀑布を一個に集めて覆へきに似たり、這々一軒の百姓  
家へ駆込み雨合りするうち、地に似合ぬ一婦人に近付き寄り、我手に入れん

塾堂曰外面  
ノ動靜未ダ  
内部ノ静  
ヲトスベカ  
ラズ

と思ひぎや茶番の咄しに乗りが来て、悉皆此方のものと思ひしを、モナる臨  
に及びませぬと、お断りの淡泊加減、一と後へ身を反して感服の外、  
揉出す智慧袋も生憎性が切れて、感服したる、一の一聲を訣別にして、婆  
さんの前も手持不沙汰に眉毛を濡し、凱歌なる民娘に奏られて、大の男の八  
人が空しく引揚る途次、文才子が持前のへらす口、  
魔性より化粧なしたる雌ぎつね  
さかされに來るおやのみの群  
北豊島郡金杉村何百十番地で、郵便配達人の外勝手の知れ悪い、さ、啼  
きや同じと冠り付く根岸の里、幾曲か行つた邊に建仁寺垣の一構へ、櫛の刈  
込みの間より赤松の一本と貫ぬいて雲を凌ぎ、都て詠への別荘好み、外  
からの只閑静に見えて内の動靜の覗ひ知るに由なしと雖も、想像と呼ぶ重  
實な忠臣が忍びの術に長じ、作者の筆鋒に附随ひ、命ずるまゝに働らせて、



塾堂曰文才  
子モ亦商法  
家ナリ言フ  
ガ如クナラ  
ハ誰カ稼グ

散財記質物流れの段といふ新作を、眞平々々劇通人の新案は富岡と大磯の失敗で、大概脚色が解つて居やス、大道具小道具の有合せを幸ひと此を装で、間に合ふものを、一幕演やセウ、全体彼の三人には少し恐れ入りやすくらナ、抜きにすれば八笑生の俱樂部に欠員が出来ても補ひに困りやすテ、蛸も道具々、不漁と来りやア酢蛸でも悪くは無い、爺ウツフ、直ぐ喰氣だ、文才子プランデーガ一本、、、劇言ぢや無いプランデーの廢玉へ、實に健康を害しやス、今日一日借切りと種りやア安心ダ、世を忍ぶ身は根岸に限りやス、オヤ、、、變な臭氣だ、異しな臭氣ダ、、、是を知り玉はぬと、日暮里の焼場の臭氣でゲス、此の臭氣に避易るやうで、是で追々地價が下る所を、一手に買占めの、、、各村連印で歎願と出かけ焼場取拂ひ、地價舊に復るソコへ内地雜居と来りやア兎相場の吹き次第でゲス、少しは商法氣を出し玉へ、爾う甘く克やア

朴巷曰大藏  
卿ハ大役ナリ  
重任ナリ

強氣ダ、剣の、克くか妙ダ、第一着に別荘を設け美人を蓄へ夫からか利術妙法、、、天機を漏すの恐れあり善哉々々として置やス、何しろ芝居ダ、草廬坊呑むばかりが能てもありやせん、酒なくは何の故か櫻かな、全体蛸に演劇が出来るもの、爺でも向八巻で踊るセハ、、、文衣裳屋や髪屋の取りに来ないうち此内輪で、、、草一ト幕開けやセウか、本問記十段目に朝顔日記宿屋の段、廿四孝回向場は僕がチヨボを引受けやス、安達夕原雪降の段、都合四幕で名々一ト幕受持ちやセウ、好らう、、、が夕顔棚のこなたよりも餘り古いから一修大藏卿を一ト幕入れやうぢやねエか、蕭子公のお得意でゲスか、、、蕭子公には遣れない、チヨボなら宜いダ舞臺は何して、、、危るから、言出し尻て喬松齋の持ちだ、評議ばかりで婿が明きやせん幕を明けた、(此間に前夜チヨボと取片付けて行つた、衣裳や鬘を取出し各自支度が出来る) 何れを見



籠城曰何ッ  
衆ト共ニセ  
ザルヤ  
又曰密計易  
敗

阿房曰音ニ  
八笑ノ演劇  
ヤ

格窓曰人ノ  
憂ヲ喜ブモ  
ノ世間少シ  
トセズ

らつし、(草廬坊は廁から鼻を摘んで出来り) 其方の一組も顯はれた  
く、同士打の酷いなやアねエか、衣へ、旦那方御申戯をかり遊ばし  
て、エへ、商賣でケスうら、幾干でもお使ひ下さる方が有難うござい  
す、へエー一寸驚きやしたへ、盗人に奪られまをと損料も頂けません  
からへ、人を出し抜いて、密り演やうとの能ない了簡だッ 構ふとの  
無い達慮なしに、衣裳も鬘も持つて行つし、此奴らア戯けやアがるから、  
爾の状はヨ、ハ、ハ、ハ、馬車から下りた舉動が何だか怪しむと思つたら  
此様な處へ忍び込んで、罰が當つたんだサ、氣の利いた衣裳屋ダ面白い鬘  
屋だ、意地が悪い奴等だ、何して此處を探し當やした、何も斯うも無  
い、昨夜から五人の行跡が知れないから、何となく徜徉て居ると、上野の  
新坂下で此二人が、演劇の話をして行くから聞いて見ると、是々の家で  
斯うだといふから、夫の斯だと一途に來て見たら、圓星中の鏡さこそ、

獨逸の苦ルツア砲日本の村田銃も、非職だらうッ、一人で宜いといひ出來  
いものヨ、耳打をすれば斯な失敗は無エヨサ、一体此家何だ、草橋  
齋の下宿の悪意な家の隠居所サ、舞臺料の出ずに、幾日でも居られるとい  
ふ極割方の宜い家うら思ひ付いたやつサ、皮肉な輩だナ本等に信實が  
有りやせん、文才子や劇通人は何した、ナンダ、内所で呑、酷い  
、、斯ういふ酷い奴が有る、混雜に乗じて口を川愛がるたア圖太  
々々しい、草エ、何だつて、呑んでる、人の愛ひを喜んで居やす、思  
々しい、耐ういふ了簡やア無いが、腹の虫がグーツと鳴き出したから  
虫封しの呪咀でケス、劇ア、甘かつた、酒が有るなら此處へ出した、食  
ふ事には抜目の無い連中だ、食ふばかりなら宜いが、先までがハ、ハ、  
五人、遂に此の演劇もチヤ〜に成りやした、三人、出し抜いた罰だヨ

出しぬくも出し抜るも一つ穴なる格運れ、是も互ひに笑ひの種と、後にハ  
酒宴と成りければ、衣裳屋ハ衣裳萬籠を、鬘屋ハ鬘函を、皆夫々に取片け、損  
料を受取り、お催しの節は何時でも御用を願ひます、イヤ口那方の御趣向は  
又格別と、捨せりふ、是も商賣の愛嬌にて、暇そこく立去つたり、籠城將軍  
ハ懐中より鉛筆取出し、首を捻つて、懐紙ハ戯歌一首を認め、果ハ一同手を  
拍つて、笑ひに其日も暮しけるぞぞ。

内證で仕組む芝居ハ揚幕を

籠城將軍

何けとばかりをで半疊の入る

冬 除夜の雪

巨燧の地富火  
忘年の大茶番

同氣相寄る安樂黨、短き秋の日脚さへ長しと、脚さ滑稽的の應用に、今年十有  
一月を遊びて暮し、年の尾に迫りて明日はいよいよ鬼の来る大晦日、月の出

る夜の有りとても、鬼の来ぬ日の無くもがな、越し易からぬ年の關、通る券  
の金銀紙幣、欲しければこそ勉むるなれ、开が中に浮世を茶にし、何事も洒  
ラクリにて渡り行く聖代の恩露を充分に、浴びて樂しむ五笑樂、三個加へ  
て八笑生、秋の遊びを首尾克くも、爲損じたる腹直し自各脚色ハ腦醬を絞  
り、智慧の袋を篋ひ出し、遊び納めの大趣向、互ひに競へど是ぞとて好き分  
別も出ずして、日毎に續く酒機嫌、酔の醒めたる日も稀に、既三十日と成り  
よける。

御主人ハ御在盧カナ、草 オホンく、劉玄德ハ三ハ草廬を訪れて孔明始  
めて出やした、拙ハ孔明及すと雖も君に劉玄德の徳なけれを、爾う易く  
ハ應へられぬテ、此大雪を冒しての枉甲、定めて天下を二分して洒落道  
流行の計を踏ふ御所存ならん、一度でハ出られやせん、番 エ、面倒な大層  
らしい誤記宜、懐中で暖つた手を勞するハ勿來ない、玉脚で開き玉ふ

深眠白草孔  
明ガ天下三  
分ノ計ヲ聞  
カント欲ス  
中原ノ鹿誰  
ガ手ニ落ツ

朴巷曰少數ノ多數ニ隨フハ社會交際ノ常ナル際ノ常ナル西洋ノ政治家ガ輿論ニ順フテ進退スルガ如シ

塾堂曰近年爆發物ノ流行益々盛シ

雪火

か主人が不精だと客が骨が折れる。ト障子を足で開けて突入り。若い身で巨燧などは、爾ういふ人が懐手。雪中の御入來先々巨燧へ、瘦我慢の廢めて、是も社會の交際だ。ッ這入つて遣うか、オヤ誰だ。蓋子公に文才子、ハ、何り又企んでるナ、草拵が草盛は、お寺の庫裡でも、借家でも巨燧に居ながら忍々岡の雪を詠めるとはナツと絶景でケセウ、鳴の啼く不忍池、雪と積む山王臺ア、絶景カナ、主人一人で嬉しがつてもいけやせん、勿体ないが君に筒を授け居候を音で居候節と呼びやせウ、腹の中へ暖爐の周旋をし玉へ、君を今日から候節に敬ふから、爾イヨ居候節何分願はう實の寒いが本性ダ、一同今歸つてか、吾曹の昨夜北極旅行をしやして此大雪を踏みし、いで到着したばかりでありやスから、北極の探險なんザア罪ありマ、科代に奢るべし時は明日はいよく年籠りと切迫したが、奇妙なものナ元且から願克

く終の大晦日に成りやすナ、大晦日は皆既蝕で元日へ飛越したい、其様なに怖いのかイ、文、怖くも無いが、全体下さる日で有りやせんからナ、太平俱樂部が何々も無じに、ハザ、年を越すもをかしく無じが、草盛坊に趣向の無しかイ、實の其相談で來た様なものサ、大ありさ前代未聞珍無類の策趣向だが此人數丈けで演たら又面剣になりやす、蛸入も籠城將軍も序に劇通も召集して總會を開きやせウ、事の大さいエ、漸う身体が少し暖つた、ト此時障子の外ふて乳母が子供を隠す聲を聞いて、エ、恐れ入る子彈山門に入るを許し、肉食妻帯の宗旨の専賣でも、小兒の泣聲に念佛をかぶせた鳴物は下さらねエ、何故爾ら大きい聲をとるよ、五人は巨燧に割込んで、廣蓋を楯の上に置き、互ひに猪口を献酬しつ、酒酌み居たりしが、忽として城中聲あり、轟然たる響き、一百の地雷火の一度に爆裂したる如し、とは處で只焼たる灰を飛

造モ亦非常  
巧ニ卵五人  
ト一卵五人  
ナ騒ガノ巨  
焼ニモ迂欄  
トハ居ラレ  
ヌ世ノ中ナ  
リア、危イ  
哉

阿房曰灰中  
ノ飛道具ニ  
ハお氣が付  
キヤセソデ  
シタカ猿蟹  
ノ話シノヤ  
ウラケスカ  
ラ油断ガナ  
リヤセソベ

悟窓曰奇事  
コハ怪談ヲ  
生ズ

散しければ、ア、アツ、大變、地雷火、燧發藥、  
物騒な巨燧だアツ、三人、大アツ、誰も怪我のありやせ  
んか、何したものだ今の騒ぎで酒も肴も轉覆た、一体何が何したのだ  
王子の売が出た、下女の遣たいしく駆せ来り、下女、マア、何う為さ  
ました、何うのこのちやありやせん、吃驚すらア、下女が割れま  
したか、悪い戯だ、入れあるならあると云へば宜いの、下女は寔  
に恐れ入りました、先刻坊様が王子々々と仰やいました皆さんお不在  
で何處にも火が有りませんから、鳥渡此處へ入れて、おきましたがお目  
の早い方々ですから、大丈夫だと思つてヤ上なかつたの、眞忽でござい  
ました御免下さいまし、お怪我の、然う誰方も無いつてマア宜しうお  
さいました、只今お膳の奇麗に致して参ります、思ふ可憐を潰し  
た、夫の困りだらう代りに鱧の膽でも買ひやせウ、草元談所ぢやあ

りやせん、ハ、ハ、ハ、時に僕が一道浮みやした、醒睡し玉へ、文、

いたづらも事に依るあり破裂玉  
音にびつくを潰すさめ魂

青眼見

玉子の破裂騒ぎも鎮まりて、盃盤再び出で迎ひに遣りし蛸入道籠城將軍  
劇通人追々入來りて雪中の梁山伯、更に忘年會の問題をぞ撥出しぬ。  
草、徒党の人数が揃やア、譯なしに出來やす、趣向と云つば先斯うだ、爾  
うだ、交りかへす勿れサ、目先を替へてファンシーボール即ち  
講釋つさで有難へ、草、マアサ即ち仮装舞踏と思ひやしたか穿ちが無い  
から斯うだテ、爾ら、蒼蠅ヨ、種々な施餓鬼供養も有りやした  
が神武以來に圖にない大施餓鬼といふ脚色、骨つばくして宜らう、草、マア  
サ、上代より今日に至るまでの、情死した者の施餓鬼とい變つた趣向でダ



砂利生日相  
談纏ツテ事  
行ハレサバ  
其詮ナ

セウ、菊、面赤い子、情死供養との妙な扶つたやつだ、其脚色、  
、斯うで、爾うで、草マアサ、坊主の膽を抜き取るといふ、  
、手品た、怖い趣向だ、草マアサ、草マアサの方が多くつて、さつぱり  
本讀みが掛りやせんナ、草マアサ、ホイ又出た、斯う、  
、だて、且向ふ正面  
施餓鬼壇百味の飲食などを都て飾りつけ、後方金屏風にて建切る、施餓  
鬼壇の中央塔婆を据ゑ、南無畜生發菩提心、  
、ナアニ畜生、  
、草  
ア無い、  
、マア一杯お酌を頼ひやセウ、咽喉を濡して、南無幽靈頓生菩提  
と記し其左右の古くは半長右より近くは盛紫谷豊榮に至るまで有り  
あるゆる情死した男女の姓名を記し、導師一人鈍色七條の袈裟紫衣の本  
裝束役僧五人同じく七條の袈裟に緋の衣にて本堂に居並び、世話方二人  
羽袴羽織にて施主方を一同本堂へ案内し、施主の居並ぶを合圖に、本釣鐘  
禪の勤めの鳴物で、導師恭々しく阿房陀維經一卷を讀み、銅羅鏡鉢等の

子よろしく、導師がチーンと鈴を鳴らすをキツカケに、嵐風の陰も忍ばし  
てある三人の藝妓、白装束に三角の切を額へ宛て、ドロくの鳴物で現  
れ、六歌仙の内裏撰の合方を弾く、導師夫に連れて一寸振り事の半ばに  
て、又ドロくで、藝妓が引込むをキツカケ、天蓋と見せた蝙蝠傘が落  
ちる、導師役僧引いて引込み、役僧五人が道成寺の振事に成り、藝妓二人  
からみてチヨットをかしみの振事ありて、又ドロくにて正面の塔婆が  
倒れるをキツカケに、キツカケが大そうに、  
、草マアサ、  
、導師出て  
来る此塔婆は張抜きで、中に赤い手拭ひを仕込み、導師がコレ、  
早く鈴を上るといふをキツカケに、一同大急ぎで天蓋の旗を取つて襪に  
かけ、塔婆の中の手拭ひで鉢巻し、導師拍子木を打きヨイ、  
、とカツ  
ボレに成るといふ、一ツも卒の無い脚色だ、何と恐れ入りやしたらう、  
今までの中で、大出来の分だが年の終りに施餓鬼とは餘り、  
、皆々、延喜

春圃曰導師

でねエナ、導、其處に抜目はありやせん、導師がヤアトコで叩いて居る傘を持つたまゝ、カツボレのヨイ、と切れたところで、狂言の未廣が、とありヤールマイア、の落に成りやす、施餓鬼が喜撰になり道成寺になりカツボレに成つて未がめでたく未廣がりの五段落とは大した茶番でケス、忠臣蔵の五段目や何の素人のする事だ、都て緻密に高尙に新寄に克きたらケスヨ、コイツ大分面黒そうだ、シテ役割の、此の大雪の中なら世間が寂として、茶番にはお誂へ向きマ、其處を付込み、籠に付上つて鼻をロコツカせるぜ、籠公なんぞにやア出来ねニ趣向でケス、大屑鼻を隆くするぜ、趣向の流く公評とお聴きなさい、見物の興論がワツと沸きやす、役割の何うなるンダ、草コウと入道といふから導師は、差詰め蝸公、交際が上手だから世話方の齋候、十籠、狐君の世話方兼施餓鬼壇や小道具類の掛り、青眼見さんの木魚で文才子

ハ蝸公ヨリ  
寧口草盧公  
ノ任ナラン

朴菴曰脚色  
漸ク定マリ  
役割未決セ  
ザルニ早ク  
異議ノ端チ  
開ク拍子木  
一ヒ鳴リ舞

が太鼓劇通人に銀羅喬松齋と拙の役借を持つやせう、夫の汰目だ脚色を立てたのだから、草盧坊が作者兼導師サ、而してお寺に下宿するから施餓鬼向の萬々心得が有るだらう、恐れ入つたお見立であたじけない、皆々大賛成、全体何處で演る所存かい、場所だテ、連中が太平俱樂部だから、樂の字づくめて神樂町の安樂館へ持込みやせウ、成るだけ演劇の内密演らないと、思ひも寄らない半疊が這入マス、籠城子何だう鬱ぐぢやア無いか、籠は不賛成た、最と活潑に、世間の俗物の膽魂を塞りどさせる様に演りたい、不同意の人は遠慮なしに抜けつこむしやせう、夫なら僕は第一に齋子公に抜けて貰ひたい、然う云つたつて、困るぢやア無いか、彼の臭ひが堪らない、袖の下からアノノ散亂する悪臭が嘔吐が出そうだから、拳固のお遣ひ物を参らうか、爾う云つちや折角陽氣に纏つた演劇も中止に成るツ、今夜は稽古

幕開イテ  
全演シテ  
ルヤ否

塾堂日本回  
ノ一興行ハ  
太平俱樂部  
成敗ノ定マ  
ル所

と云ふ所だが大抵明日揃み合ひで克くたう、文才子劇通人陽氣に呑み直そう、草、何處かへ持出そうか、此雪に、足の立ちやせん、人の足が有るから宜いワ、鶯坂の伊香保か磯部へ、磯部の嫌だ、草、伊香保で今夜香明そう。

一月の初會以來失敗の打、甘く纏まるは相談のみ、今度ハ宜しと蓋を開ければ故障が屹度飛出きて、何時でも演劇ハジャクが入るを、仲間の中、で紛紜が出来て、喝采と唸らせるとも覺束なし、今度ハ晴の大演劇必らず内外の見物も有るからは、五段返しの大趣向味附や付けじと、下稽古を兼ねての香直し、伊香保温泉の二階を一室借切つて、車の齒さへ立かねる大雪なれば、他に、客の無きを幸ひ、最寄の藝妓を生捕つて後を付けさせ、斯うだ彼ア、草廬坊が作者座頭の兼勤で、一夜漬の遠稽古も腕に覺々の滑稽なれば皆夫々に飲込んで、いよく三十一日の午後七時、一番シヤギリを待つ

たりける。

借も牛込神樂町に近來新築の安樂館ハ、三階造りの貸席兼料理富士と筑波を見晴して、空氣が好いとか高燥で眺望が佳とか、日々に幾組の來客も寢ハ家名の安樂社會世界の苦勞ハ、空氣で渡る太平の餘澤に浴する幸福者、人を茶にし世を茶にし遊戯三昧の悟を開き、萬事理屈は俗でケスと横へ澄して五笑樂、三人足した八笑の太平俱樂部が年籠りの主催し、一年中の事を忘れて年を送らんと、人の忙しいハ他所に見流し安樂館の奥二階、巨鼠の入口に名題招牌を掲げたり。

ワット沸立つお臍の茶釜  
フット噴き出を見物の興詞

### 太平樂今年暮際

五段返し

内所の事ハ見たり聞きたがる人の情、斯くと噂ハ一ト晩の中に知れ洩り、午後よりの雪の止んで往來は一線の通路も開け、云ひ合ふねと安樂館に大

砂利生日秘  
フル事ハ直  
ニ漏ルハモ

層な茶番が有るそうだと、落語家か役者か又の辯問か、ナアニ洒落た書生さん  
が休暇中の鬱散たどサ、爾うだらう書生か何かの暮知らずで無ければ、其極  
な氣樂も真似の出来なからうと、評判とりにくく催し手の耳に入りて、内々に  
評判と共に鼻も高く、豫ては午後五時半の樂屋入りを、四時頃より徐々繰込  
み、囃子方と爪弾で下稽古、屏風の陰の打合せも、吾こそ濁采と云せんもの  
と、内々腹にて勇みしなるべし。

深眠日館主  
ノ請願至當  
々々

存主 へエ皆様も早くお揃ひで、……エ、今日は又有難うぞんじますお陰さ  
まで、今晚の好い年を迎へられます、夫に雪もカラリと晴まして、寔にハ  
ヤ、ハ、ハ、ハ、ハ、草子今夜は大層お世話になりやす、大分大勢の人達が見え  
やまが、見物の参て中た通り一切……エ、エ、エ、其見物でござい  
ます、手前方でのモチ内所の極内に致して居りましたが、貴客様方のね  
催はしなれば、賑いや、面白いと、何がサテ町中の評判でござりまし

朴巷日請願  
チ容ラレ館  
主來賓ノ喜  
悦思フベシ

て、エ、別に、……お差合の方もございませぬが、……御愛顧のお客様  
方の、お娘様や御新造様方で、殿方と申せも別に何でござります、……近邊  
の者でお差合の有るやうな方ではござりませぬが折角のお催しでござい  
ますから、……何ぞ少々拜見を願ひたら存じますのだへエ、ハ、ハ、ハ、イエ  
廊下からでも苦しいのござりませぬ、草川蛸入郎子折角館主の請願て  
ゲス打用致して遣ひしヤセウの、同じくなら衆人の前て技量を……、見  
物の多い方が失敗業も有るといひヤスカハ、……、草 お許し下さいま  
すか、……、如何にも、……願ひの趣は許して遣ひす苦しう無い女中方  
の近うく、強氣に役者がつて、異に身振ぢやア無いか、草 エ、ハ、ハ、ハ、  
賑な……の過言々々、……文才子モチ、シヤギツても宜いせ、女の子が待  
つて居やす劇通人面の拵へより、鳥渡シヤギリ王へ、ドレ一囃し 打ち  
込るか(太鼓の音ドロン、ドロく、笛の音オヒウル、ハ)

管城日甘ソ  
舞ヒ終レバ  
大出来々々  
々此處片唾  
ヲ吞ンデ見  
物スベシ

九十  
文才子と劇通人が先一番のシヤギリを入れて太鼓を叩けば草盧坊を始めとし、孰れも鏡に向ひて顔を拵へ、各々坊主鬘を冠りて緋の衣に錦襦袢の袈裟、若附もチャンと出来上り、八時の時計が鳴るを合圖に、雛子はドイン、オヒューと切上げ、本釣鐘の音コーン、コーンと鳴物の知せに、幕開を待構へたる見物の男女の、先を争ひ廣座敷へ詰かければ、百疊敷の大廣間も僅に供養の席を剩すのみ、番僧等ハツツと澄して定めめの坐に就き、ガーン、ワーン、ガーン、ガーンと打鳴す拍子に隨れて、今日の導師徐々と正面に居直り、抹香を捻つて恭々しく香爐に盛り、九拜なして阿房陀羅尼經一卷聲高らかに讀誦しける、程なく供養も終りて、導師は正面位牌に向ひ、南無幽靈鍾痴氣往生と唱へて、チ、チーンと鳴らす鈴の音に、屏風の陰の合方はチャン／＼とお詠への三味線が弾ながら、幽霊の拵へて施餓鬼壇の傍に現はれ、チャン／＼とヨイ、ヨイ、我いは芝居の辰巳ときは町と喜

庚嶺叟曰此  
結局如何

撰の歌になり、導師は、振り事にかゝる折しも、見物がソツと云ふ聲に導師ハ圖に乗り、しかも浮世を離れ里世事で丸めて浮氣でこねて小町櫻の、と脈身澤山で踊りの最中、遽に見物はソラーと騒立つと思ふ間に、黒い洋服を着たる男と、羽織袴の男が三人にて、ドヤ／＼と入来り一人ハ突然導師の手を取り、跡の二人ハ番僧と幽霊の前に立塞つたり。  
今日ハ是大晦日である、一夜を關し替へて越し兼ね、今夜死ぬ者は地獄に到り、四苦三十六八苦七十二の苦みをするさへ云ふに、人の氣も知らず夜中の六番三昧、不埒千万輕燒同然な奴で有る、屹度詮議の次第も有れば早々同道致せ、コリヤ館主ハ居らぬか、亭主、ハイ／＼、手前は一向向も存じませんもので只ホンの座敷を、三人で有らう其方の知るまい、此者どもハ仔細あつて、一同連れて參るから、跡ハ取片付け火の用心を致して屹度締りを致せ、見物達の用事ハ無いから、勝手に引

塾堂曰勢此  
コ及ソデハ  
辭シテ演藝  
ナ他コ讓ル  
ノ外ナシ

取れ、……、又、……、失敗つてか、……いよく、蝸入郎、……、泣つ面を  
したつてしかたが無エ、僕ア悪くしたら斯と内々覺悟して居た、太鼓  
を打いた丈だから、三人、静かに致さぬか、……、早く馬車へ乗れ、……、  
驚きながら是非なくも引立られて、其馬車を見れば真黒にして、いと滑らか  
ならねど、拒むに拒めず何うなると、怖ながらも馬車へ乗込めば、彼の三  
人の中二人は同じく乗込み、一人は御者と相並んで、成るだけ早く、……、宜  
か、……、宜しくと一言の應答に一鞭加へて、馬丁がエー、オーと一聲  
馬車は砂利烟を蹴立て駈出したたり。

青草盛坊モチ一時間の餘も経つやうだが、何處へ連れて行かれるンだら  
うエ、……、拙にも解りやせん、蝸入郎、……、僕にも解らぬエが、外が些少  
も見ぬない、馬車へ走り續けたが、……、見當が分らない、劇通人君の  
隣りへ、内々聞いて見玉へ、劇モシ少々、……、静かに致せ、……、参るところ

まで参れば事は相分るワ、劇へ、……、いよく解りやせん、  
既に三時間も経つと思ふ頃、馬車は止り乗合し二人の車を下り、外より堅  
く閉して何れへか行きしが、姑らくして出来り又もや五六七間と思ふは、  
馬車を駈りて止めさせたり。

△一同静に車を下りろ、騒いでは相成らんぞ、草ハテ、彼等を降つた雪が  
少しも積つて居ないが、是は稀有だ、雪が有れば雪明りといふとも有る  
が、真闇で些少も知れやせん、燈が射したから彼處だろう、△静かにし  
て其口から入る、皆々、ハイ、……、エ、何した事でゲスエ、  
玻璃戸を漏れ来る微な光線を心當に、四五間進み行けば銅網燈籠の中に、西  
洋蠟の一本點しありて側に西洋戸の入口あり一方口にて、四邊は白き紙の  
張附たる廊下にして外に入るべき口なけれど、西洋戸を引開けて、皆々内に  
進み入るや否や、何處とも無く太鼓の音の、ド、……、ドーン、……、機會に眼

砂利生曰果  
處シテは何ノ

阿房曰鯉丈  
ノ真似ヲ開  
化ヲ寫シタ  
ハ感服シヤ  
センナトテ  
モノ序ニ催  
眠術ヲ六人  
トモ眠ラシ  
テハ何ウシ  
グセウ

朴菴曰坐間  
臣太郎ぞん  
民ノ風采想  
見スヘシ

塾堂曰恐ラ  
クハ座間家  
ノ趣向草盧

を射る如き光りして、一室内の晝を欺むばかりに輝きぬ。

草 エ、ははド、何う、何う、ハア、文 イヨ、  
劇 、、、、、皆々 一体此處は、、、、女ノ聲  
坐間様のお入イ、皆々ハ

、アー、、、、(オヒーヤレー、ヒウヤラリ、ドン、と鳴物の聞える) 草  
此鳴物の本物だ、、、、皆々 いや、稀有だ、、、、夜が明けると野原に  
成るといふ譯で、無らうか、文 併し暖爐に火が燃えて、電氣燈が點く所  
は、狐の作爲に、出来過ぎてる、、、、今の呼聲は、、、、

と評議區々の折から聞ゆる風琴の音の床奥しく、正面の戸を左右へサツと  
開かせて、入來るの廿年餘りの立派な婦人夫に續いて四十有余の紳士然た  
る人物と十七八才なる、絶世の美人にて附隨ふ女畫ハ皆矢飛白の對の衣服  
に黒縞子の帯を斜に袷負たる御殿風、男ハ羽織袴の威儀を繕ひ徐々進みて  
中央の椅子に着きぬ。

文 ヲ、、、、草 ア、、、、貴婦人の確かに、、、、民 日雨合りを致せし百姓家で  
お目に掛りました、、、、草 お尺様で、、、、皆々 ゲンナナア、、、、今日のお催  
しのお邪魔を致しまして寔に濟ませんが、、、、此方ハ旦那様の坐間臣  
太郎様方此のお娘様おだん様でございます、お近付にお我り遊ばせ 草 ハ  
、、、、一体全体何うした譯で、ケスカナア、何か失敗が出来やうと  
兼ねて心得て居ましたが何だか薩張り、、、、左様でござらう手前方  
でも娘が茶番が大好きで、毎度催はしなぞが頃日柳島の別業で催しの節、  
是なる民が用達しの歸り道雨合で近付になつたる由、其節お連れ申せ  
ば好つたと、やたくらんで好き折も存じて居りし處今日年忘れの催し  
を致さんとせしが、貴君方にも催しのある由に承り、お近付さかた  
くにお趣向して、先は、、、、民 重疊々々、、、、さん 喧嘩場から山科の場まで







一 新編 揚子江のそとへ

百

明治二十年  
笑談 太平俱樂部

明治二十年十月十一日版權免許  
同二十一年二月七刻成出版

(定價金三十五錢)

著述人

愛知縣平民

奥村金治郎

京橋區南傳馬町  
一丁目二番地

出版人

愛知縣平民

佐藤乙三郎

日本橋區大傳馬町  
二丁目十五番地

西 刷 人

新

和 三 郎

京橋區西紺屋町  
一番地丸重活版舎内

# 佐藤成文堂出版書目

龍溪矢野文雄先生 閱  
思軒森田文藏先生 潤  
鶴巢松葉卓爾先生 編修

## 西 俗 雜 話

洋裝美本全壹冊  
定價金六拾錢

本書は報知社の矢野龍溪、森田思軒、其他諸先生が歐米諸國周遊中其の見聞せる所を細やかに物語られしを松葉先生の編修されし者にして一般の禮儀作法、衣服の着方、食事の仕方より芝居の模様、筋書、國會議員選舉の振合、酒屋、湯屋、菓子屋、八百屋、其他歐米諸國を旅行するに如何せば品好く費少なく行かれ得るや如何にせむ西洋人に見下げらる憂ありや等すべて法とすべき事、又た年若き男女が花を相贈るの風、其花に意味を含ましむるの風、正月の代りに教祖誕生の日を祝ふ風等、有らゆる歐米諸國の風俗を詳記し、外編には彼地禮法の規則をさへ附録したれば之を讀まば

印刷人

筋

和三郎

京橋區西紺屋町  
一番地丸車活版舎内

# 佐藤成文堂出版書目

龍溪矢野文雄先生 閱  
思軒森田文藏先生 刪潤  
鶴巢松葉卓爾先生 編修

## 西俗雜話

洋裝美本全壹冊  
定價金六拾錢

本書は報知社の矢野龍溪森田思軒其他諸先生が歐米諸國周遊中其の見聞せる所を細やかに物語られしを松葉先生の編修されし者にして一般の禮儀作法衣服の着方食事の仕方より芝居の模様筋書國會議員選舉の振合酒屋湯屋菓子屋八百屋其他歐米諸國を旅行するには如何せば品好く費少なく行かれ得るや如何にせむ西洋人に見下げらる愛わりのや等都べて法とすべき事又た年若き男女が花を相贈るの風其花に意味を含ませしむるの風正月の代りに教祖誕生の日を祝ふ風等有らゆる歐米諸國の風俗を詳記し外編には彼地禮法の規則をさへ附録したれば之を讀まば

坐ながら洋行して其事物風俗を目撃する想像あるべく又洋行する人々には直ちに其の案内書となるべく又西洋人と交際する人々には其の心得書となるべし殊に此書は現在森田先生に乞ふて文章を刪し矢野先生の閱を経たれば平易明白何人にも能く讀みやすし尙ほ續編には兩先生自筆の歐米紀行及び其他の珍話を掲ぐ

英國法學士技藝士末松謙澄先生序

日本文學士坪井九馬三先生校閱

日本帝國大學々生相良常雄先生纂譯

# 新編論理學

紙數凡三百三十頁

演繹法  
歸納法  
●定價金一圓

●郵送金三十錢

論理ノ學タル哲學ノ一科ニシテ思想ノ方式ヲ論ズルモノナレバ其說妙遠深微ニシテ極メテ難澁ノモトノス故ニ論理書ノ梓ニ上ルモノ世既ニ乏シカラズト雖ハ多クハ高尙ニ失シ或ハ錯亂ニ流レ理明ニ義精ノ豁然貫通スルモノニ至テハ殆ンド難シ本書ハ著者大學ニ在テ講修ノ餘暇シエボン氏論理學及ヒバイン氏論理書等其他廣ク諸書ヲ參觀シ理論ハ適

例ニ由リ行文ハ平易ニ從ヒ務テ簡易明晰トシテ之ヲ解説シ且ツ譯字ハ専門諸學士ノ著書ヲ始メ凡國語ヲ以テ成レル諸書ヲ對照シ最モ適當ナルモノヲ擇ビ其穩カナラザルモノハ更ニ妥當ノ新譯ヲ挿ミヲ解シ易カラントヲ求メ猶文學士坪井先生ノ校閱ヲ經テ之ヲ刊行シタル者ナレバ實ニ論理ノ書ニ於ケル隔靴搔痒ノ憾無キ無類ノ良書ト云フヘシ請フ江湖言論ヲ重ズルノ諸彦幸ニ一本ヲ購フテ座右ノ寶典ト爲シ給ハン

小石居士校閱

小林清親先生戲畫

奔雷道人戲著

## 明治笑談 太平俱樂部

洋製美裝石版密書入

全一冊定價金五拾錢

本書ハ自ラハ笑ト稱スル八人ノ洒落ナ書生ガ一年中ノ遊戲ニ趣向ヲ盡シ「白痴」を嚮カ以歐洲行「愚人」を嚮カ「愚道」の究計「爆雷」を怖れて美人の嘲弄「太平」を盡して拙劇の失敗「威」ヲ微チ穿チ隱チ許キ三十三年ノ大晦日ニハ笑生ガ計畫シテ茶番ハ或通人ニ裏チ搔カレ三十四年ノ拂曉一番関ノ家

鶏ニ勝聲ヲ掲ケラレ苦計咸ク失敗シタル滑稽(實ハ其皮ニシテ肉ト骨ハ  
讀者ノ判斷ニアリ)盡シ奇々怪々一言一句モ讀者ノ氣ヲ揉マセザルナシ  
苟クモ社會ノ大勢ニ注目シ流行ニ後レザル紳士淑女諸君ハ是非トモ一  
本ヲ購ズンハアル可ラザルノ珍書ナリ嗚呼夫レ近時ノ珍著ヤ珍著

小石居士永井先生演述

天放仙史大江先生筆記

### 笑變哲學

洋裝中本全一冊  
定價金五拾錢

本書は小石居士永井先生一夕ピールの醉に乗じ上願と下願のブツカル  
に委せて放言せしを物好きき大江天放仙史が筆記したる處恰も大法螺  
の鳴るに似たり天下を愚よして萬象の理を看破り一種奇態な變見を開  
いて殆んど世の中は番茶の出廻しの如く見透し万象の衆理はメチヤ  
〜に叩き毀はされ始めは一理を言ひ中は散じて万事を穿ち末は復合  
して一理と爲之を放ては六合に塞がり之を巻けば密に藏る寔に奇想  
異説を極め實に變體の哲學にして天下無雙の珍書一たび市に出て万書

顔色無し先生敢て世に公にせるを欲せず強て請ひ鉛槧に附して天下の  
俗夢を攪破せんと之を讀ますんば當世の士人にあらす宜しく一本を  
購ひ廣告よりも尙其廣大なるを知り玉へ

松永道一先生著

## 新商策

西洋綴小本全一冊  
定價六拾錢

人生榮耀快樂の希望 金力は全權の原因  
海防費賦納者の取扱 商業は人間の最良業務  
商業に依つて巨富を作るも亦英雄なり  
ナホレナン、ワシントン、の英名予れ讀者と壓せん  
ゴールド、シルップの富、驚ろくに足らず

一般商業の投機なり  
投機ノ危嶮ハ恐るべき者にあらず 傀儡師ガ人形一般の愚商人  
投機を恐るゝ世人の卑見 投機ハ賭博と異なり  
大商人の成り立ち方

第三編 第四編 第五編 第六編 第七編

第三編 商業の權謀 商業の權謀に異なり 誰れか權謀を不徳の行爲といふ  
 二其策業商 權謀術數 商業の勞苦を要する者なり 何人が大商人たるべき  
 詐偽の權謀に異なり 慎むべし詐偽欺騙  
 其學者の説予れ信せず 詐偽を避る注意  
 斥排偽詐 苛酷なる詐偽の責  
 第四編 資本の使役 最大利潤を獲得する口傳 熟練なる商人巧みなる利子計算家  
 致富の秩訣 貸借に情を用ゆる不都合  
 第五編 轉業 時勢の變遷商業の關係 轉業の利益と必要  
 祖先の營業を云々するの愚 一業固着の陋見  
 第六編 廣告 商品廣告 奮進賣込  
 英國に於ける万国工藝博覽會の權謀  
 第七編 賣込 商品の異様廣告の商賣繁昌の完全策に非ず  
 商賣繁昌秩訣

第八編 第九編

第八編 商人の成業 社會の動靜と立身出世の關係 日本の現況 甲  
 一其知須人商 易難業成 商人迷夢の開發  
 第九編 商人の智識 社會二様の狀態 日本の現況 乙  
 二其知須人商 頭種識智 商人迷夢の開發

田島任天居士述

佛教滅亡論

洋綴美裝小本全一册 定價金六拾錢

此書の田島任天居士が未曾有の卓見を以て今日の佛教社會を看破し早晩滅亡して現世界に痕跡を止めざるを病論したる書にして實に空前絶後の一大著述と云ふ可し

藤澤蟠松先生校閱  
牛山鶴堂先生著述

再板 日本新世界

洋裝中本全一冊  
美麗石板畫挿入  
定價金六拾錢

我が日本ハ後來如何ニ處置ス可キヤノ問題ハ今日世論囂々トシテ新聞ニ演舌ニ一日トシテ之ヲ見ザル事ナシ牛山先生我が將來ニ見ル所アリ茲ニ數名ノ才子佳人ヲ仮出シ其一離一合ノ間ニ我が國ノ將來ハ斯クスベシ斯クセザル可カラズ斯クナラザルベカラズト詳論セシモノニシテ愛國ノ才子佳人ハ一讀シテ以テ悟ル所アソ

渡邊虎太郎編纂

泰西名士蓋世偉談

石版密畫肖像入  
定價五十錢

右ハ渡邊虎太郎君ノ快筆ヲ振ヒ上ハ希臘ヨリ英米各國ノ名士哲士ノ言

行ヲ蒐集シタルモノニシテ快活ナル政事談アリ悲憤ナル慷慨論アリ深遠ナル哲學論アリ美妙ナル佳話アリ一ツハ政事學理ヲ論ズル材料トナリ一ツハ修身齊家ノ基トナル古今稀有ノ良書ナリ

蟠松藤澤平司先生校閱  
鶴堂牛山良助編纂

再板 英和對譯 西洋落語

西洋綴美本  
定價三十錢

歐洲文明國ノ俗間ニ行ハル、滑稽洒落ヲ集メ且英和對譯ニセシモノナレバ一ハ外國ノ事情ノ一斑ヲ知リ一ハ英學ヲ修ムル者ノ爲ニ快樂中ニ利益ヲ享ソル古今無類ノ珍本ナリ

西曆千八百八十六年新板原書

再板 改訂 ハーレー氏萬國史直譯

洋裝美裝全二冊  
定價一圓三十錢



同書ノ梓ニ上ルモノ既ニ汗牛充棟五車以テ輸スルノ勢アリ然ルニ其書  
タルヤ尽ク一千八百七十五年ノ舊版ニ係ルヲ以テ近代追加ノ記録ヲ漏  
スノミナラズ譯法粗漏譯語不當徒ニ初學ヲシテ迷津ノ感アラシム弊舖  
之ヲ憂フルヲ久シ故ニ今回一千八百八十六年増補改板ノ原書ニ據リ之  
ヲ譯シタルハ各國近代ノ記事ハ舉テ此書ニアリ特ニ米國ノ如キハラ  
ソド將軍薨去ニ至ル迄ノ事情ヲ掲載シ且ツ譯語ハ努テ簡明平易ヲ主ト  
シ加フルニ原字ヲ譯語ノ傍ニ挿入シ猶ホ欄外ニ原書ノ頁數ヲ記シ以テ  
讀者ヲシテ搜索對照ヲ便ニセリ故ニ本書ハ從來坊間ニ横ハル直譯書ノ  
比ニ非ズ其群ヲ擢テ衆ニ秀タリト云モ決シテ不可ナキナリ

子安 峻  
柴田昌吉 同著

附音 英和字彙

美麗洋裝  
正價一圓八十錢

世ニ喝采ヲ博シタル日就社出版ノ英和字彙ヲ其儘寫真石版ニ縮寫セシ  
モノニシテ誤字脱字ノ憂ナク插圖ハ少シモ減少セズ且ツ價ノ廉ナルニ

不拘紙質製本ハ頗ル注意シタルハ學生諸君ノ爲メニハ實ニ難得完全ノ  
良書ナリ

松本孝輔先生校正  
牛山良助先生編纂

改正 松本氏會話

美麗洋裝  
寸珍全一冊  
定價金五十錢

廿年前松本君ガ著述ニ係ル會話篇ハ非常ノ喝采ヲ博シ今日ニ至タル迄  
其印刷部數日ニ月ニ嵩テ止ズ翻刻書ノ多キヲ既ニ十板ニ越エ以テ該書  
ノ鴻益アルヲ知ル然リト雖惜哉時世ノ變遷社會ノ進化ニ依リ其譯語ニ  
多少ノ變換ヲ生シタル故ニ今回牛山君松本君ト計リ其譯語ヲ質シ其他  
有名ノ會話篇ヨリ日常必需ノモノ數十個ヲ摘譯シ卷末ニ書翰ノ認メ方  
ヲ示シ以テ完全無缺ノ良書ヲ成シタルハ世ノ洋學ヲ修メントスル者及  
ヒ洋人ト對話筆談ヲ爲サント欲スルモノ必ス一本ヲ購テ照閣ノ電氣燈  
トセヨ

# ス井ントン氏萬國史直譯

洋裝美本  
全二冊  
定價

此書モパーレーノ氏萬國史直譯ト同様ノ直譯書ニシテ譯文ハ專ラ平易ニ綴リタルハ實ニスノントン萬國史ノ直譯書ノ完全ナルモノナリ

正音 適切 ナシヨナルリードル第一獨案内

定價金 十錢

正音 適切 ナシヨナルリードル第二獨案内

定價金 廿錢

正音 適切 ナシヨナルリードル第三獨案内

定價金 五十錢

世間ニ有フレタル案内書ハ累々トシテ倫敦ノ紙價ヲ騰ス勢アレトモ盡ク發音ノ誤リ訓譯ノ不適切ナル實ニ英學ヲ生ノ爲メニ不案内書ノ嘆ヲ

發スルコ至レリ此書ハ藤澤先生得意ノ婆心ヲ以テ發音ト訓譯ニ意ヲ注ギ一ト度ヒ對照スレハ瞭々トシテ闇夜ノ電氣燈ニ於ケル想アラシム殊更欄外ニ節々注ヲ掲ケ句々明瞭周チク到ラサル所テシ學生諸君一本ヲ購フテ弊舖ノ欺カザルヲ知リ玉ヘ

米國ウイルソン氏  
日本近藤 駒吉

第一リードル獨案内

洋綴全一冊  
定價十五錢

同

第二リードル獨案内

洋綴全一冊  
定價廿五錢

ス井ントン小文典

全一冊  
定價二十錢

蘆田東雄編

實地製法獨案内

洋綴全一冊  
定價二十五錢

木内文友編輯

萬類活用 正則英和用文

寸珍洋綴全一冊  
定價十二錢

ピ子ヲ氏小文典

全一冊  
定價十錢

スペンセリアン習字帖

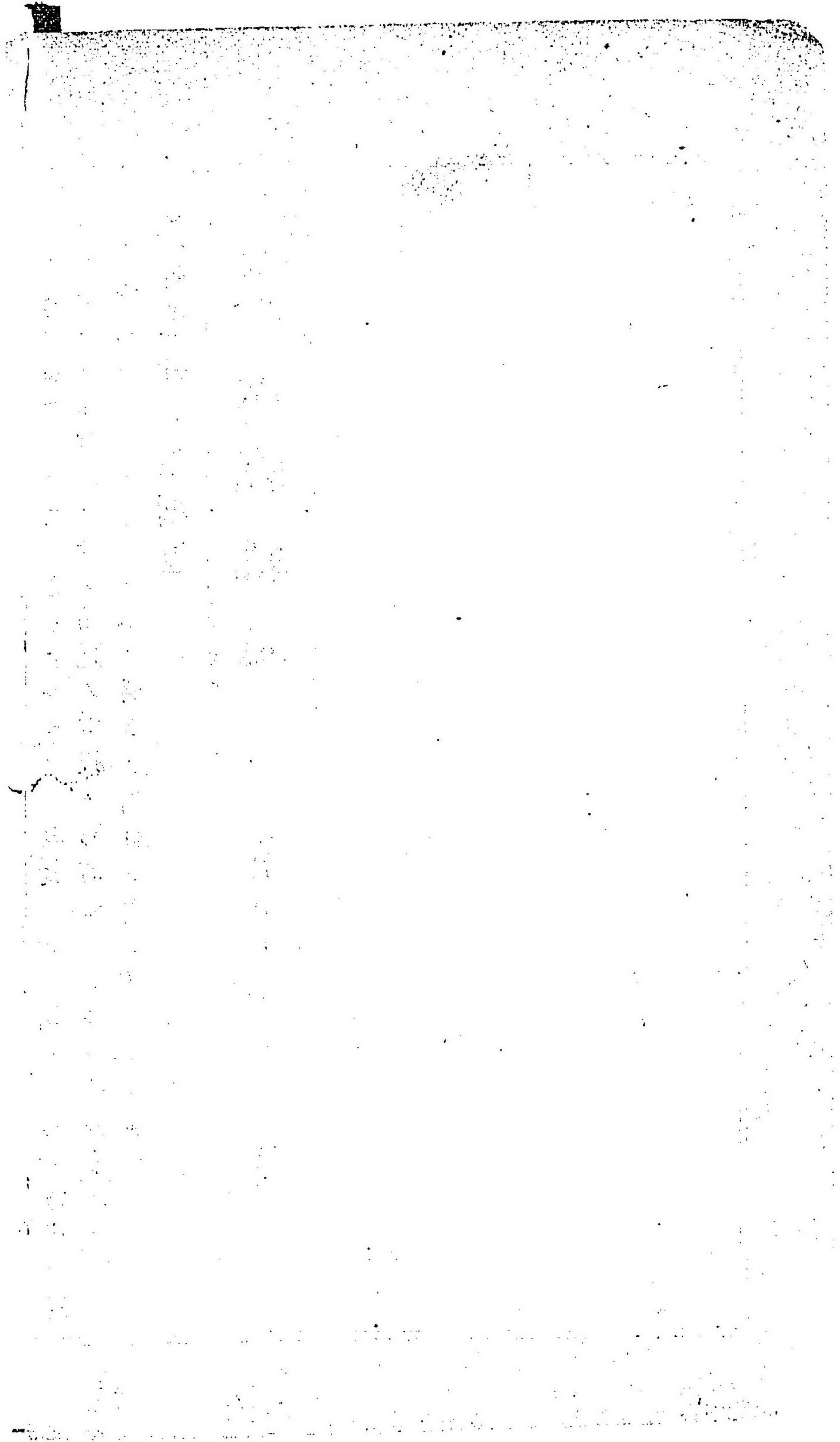
自第一 各七錢 宛  
至第五

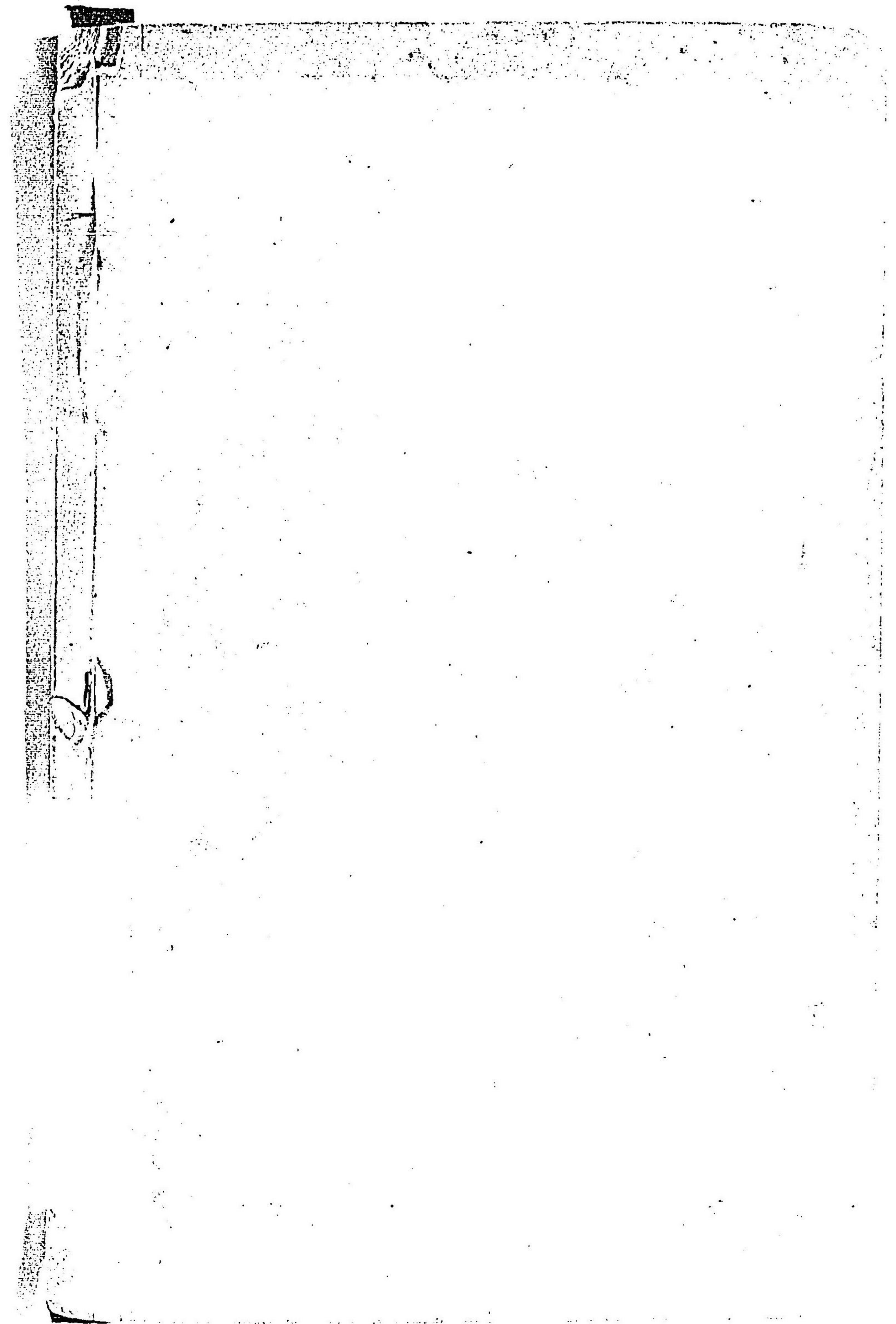
實用ニ適シ筆法ノ正シキハスペンサー氏ノ習字帖ナリ方今我が邦公私

ノ學校ニ於テ弘ク之ヲ教科書トナスハ其証トシテ見ルニ足ル弊店今回  
日本第一ノ彫刻師ニ命シ精良ノ木板ヲ彫鑄セシメ茲ニ舶來書ニ讓ラザ  
ルノ翻刻ヲナセリ諸君一本ヲ購フテ瑞軒ノ虛ナラザルヲ知レ  
奥邨藍外先生編述

現今政談 演說軌範

洋製小本 全一冊 近刻





特11  
84

3440

明治  
笑談  
太平俱樂部  
小石居士閱  
奔雷道人著  
成文堂發行



091784-000-1

特11-84

太平俱樂部

奔雷道人/著

M21

DBO-0299

